

令和元年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

鬼倉遺跡

花立遺跡

中沢遺跡

鬼倉遺跡出土須恵器・土師器・木製品付着物の科学分析

2021

新潟県加茂市教育委員会

令和元年度

加茂市内遺跡確認調査報告書

鬼倉遺跡

花立遺跡

中沢遺跡

鬼倉遺跡出土須恵器・土師器・木製品付着物の科学分析

2021

新潟県加茂市教育委員会

序

北越の小京都と呼ばれる加茂市には、豊かな自然環境に育まれた先人たちの暮らしの跡が遺跡として地下に埋蔵されています。これまでに、市内全域から埋蔵文化財包蔵地 177 か所が確認されています。すべての遺跡の内容は詳らかになっておりませんが、各々地域固有の大切な文化財と認識しています。

教育委員会では、埋蔵文化財包蔵地が確認されている区域で、様々な開発事業が計画された際には、文化財保護法に基づいた手続きを行い、試掘・確認調査を行った上で、遺跡がやむを得ず壊されることとなった場合に、発掘調査を行っています。遺跡は記録保存される形になります。

加茂市では平成 7 年度から継続して、各種の開発事業に対応した市内遺跡試掘・確認調査事業を国庫補助金と県費補助金を得て実施しています。

本書は令和元年度に実施した 3 遺跡を対象とした試掘・確認調査の結果報告書です。また、鬼倉遺跡から出土した須恵器・土師器・木製品の付着物がみられるものについて、漆器文化財科学研究所の四柳嘉章氏にお願いした分析結果について、あわせて収載しました。

今後、これらのささやかな報告が各地域の歴史を語る資料として活用され、埋蔵文化財に対する理解が深まれば、この上なく幸せであります。

最後に、発掘調査に対して様々なご指導とご協力を頂いた新潟県教育庁文化行政課、並びに試掘・確認調査に参加された地元の方々、地権者および工事関係者に対し、ここに深甚なる謝意を表する次第であります。

令和 3 年 3 月

加茂市教育委員会

教育長 山 川 雅 己

例 言

- 1 本報告書は、令和元年度に新潟県加茂市内の各種開発に伴い実施した3遺跡における試掘・確認調査と鬼倉遺跡から出土した須恵器・土師器・木製品の付着物について実施した科学分析の記録である。
- 2 調査は鬼倉遺跡が農業用排水路改良工事、花立遺跡が道路建設工事、中沢遺跡が民間開発に伴い実施したものである。
- 3 確認調査の経費は、国庫および県費（一部を除く）の補助金交付を受けた。
- 4 調査は加茂市教育委員会が主体となり実施した。調査体制（令和元年度）は以下の通りである。

調査主体	加茂市教育委員会	教 育 長	殖粟敏夫（令和元年5月9日まで）
		教 育 長	山川雅己（令和元年7月1日～）
総 括		社会教育課長	明田川太門
庶 務		社会教育課主査	石井美代子（令和元年7月31日まで）
		社会教育課主査	吉田如菜（令和元年8月1日～）
調査担当		社会教育課課長補佐	伊藤秀和
調査補助員	鈴木 進		
現場作業員	太田征吾・平澤章夫（公益社団法人加茂市シルバー人材センター会員）		
- 5 調査記録図面・写真類は一括して加茂市教育委員会が保管している。
- 6 本書で示す方位はすべて真北である。
- 7 挿図に使用した既存図面については、その出典を記した。
- 8 写真図版2の空中写真は、(株)オリスが平成3年11月6日に撮影した縮尺約1/12,500×97%のものを使用している。
- 9 引用・参考文献は著者と発行年（西暦）を〔 〕で文中に示し、巻末に一括して掲載している。
- 10 本報告書の執筆と編集はすべて伊藤秀和が行ったが、第V章については漆器文化財科学研究所四柳嘉章氏に資料を委託し、四柳氏から原稿を頂いた。
- 11 写真図版1・4出土遺物および写真図版6～8分析遺物の写真撮影はフォーカルに委託した。
写真図版4の11アップ写真撮影については田海義正氏（(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団）による。
- 12 挿図、写真図版の版組みおよび全体のデジタル編集・データ化は、(有)不二出版に委託し、完成データを印刷業者へ入稿して印刷した。
- 13 鬼倉遺跡・花立遺跡の土器については春日真実氏（(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団）から御教示頂いた。
- 14 発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏から多大な御教示・御協力を賜った。厚く御礼申し上げる次第である。（敬称省略・五十音順、機関などは順不同）
小熊博史・春日真実・田海義正・立木宏明・四柳嘉章
(公社)加茂市シルバー人材センター・(株)ジョブ・(株)エステートコンサルタント
(公財)新潟県埋蔵文化財調査事業団・新潟県教育庁文化行政課
加茂郷土地改良区・加茂市建設課・加茂市文化財調査審議会

目 次

第Ⅰ章 序 説	1
1 令和元年度事業の概要	1
2 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章 農業基盤整備事業関連	3
1 調査に至る経緯	3
2 鬼倉遺跡	3
(1) 遺跡と試掘調査の概要	3
(2) 層 序	4
(3) 遺構と遺物	4
(4) 調査のまとめ	5
第Ⅲ章 道路建設工事関連	6
1 調査に至る経緯	6
2 花立遺跡	6
(1) 遺跡と確認調査の概要	6
(2) 層 序	6
(3) 遺構と遺物	8
(4) 調査のまとめ	8
第Ⅳ章 民間開発関連	10
1 調査に至る経緯	10
2 中沢遺跡	10
(1) 遺跡と確認調査の概要	10
(2) 層 序	11
(3) 遺構と遺物	11
(4) 調査のまとめ	11
第Ⅴ章 鬼倉遺跡出土須恵器・土師器・木製品付着物の科学分析	12
1 はじめに	12
2 分析の方法と結果	12
(1) 赤外分光分析	12
(2) 実体顕微鏡観察	13
3 おわりに	13
第Ⅳ章 ま と め	27
1 令和元年度調査成果について	27
2 鬼倉遺跡出土の漆付着土器について	27
《引用・参考文献》	28
《別 表》	29
1 鬼倉遺跡 土器観察表	2
2 花立遺跡 土器観察表	3
3 花立遺跡 石器観察表	
4 鬼倉遺跡出土須恵器・土師器・木製品観察表（付着物の科学分析試料）	
《報告書抄録》	巻末

挿 図 目 次

第 1 図	確認調査実施遺跡と本書関連遺跡位置図 … 2	第 15 図	赤外線吸収スペクトル (1) …………… 15
第 2 図	鬼倉遺跡推定範囲と調査対象地位置図 … 3	第 16 図	赤外線吸収スペクトル (2) …………… 15
第 3 図	鬼倉遺跡試掘調査トレンチ位置図 ……… 4	第 17 図	赤外線吸収スペクトル (3) …………… 16
第 4 図	鬼倉遺跡試掘調査トレンチ土層柱状図 … 4	第 18 図	赤外線吸収スペクトル (4) …………… 16
第 5 図	鬼倉遺跡試掘調査出土遺物 …………… 5	第 19 図	赤外線吸収スペクトル (5) …………… 16
第 6 図	花立遺跡推定範囲と調査対象地位置図 … 7	第 20 図	赤外線吸収スペクトル (6) …………… 17
第 7 図	花立遺跡確認調査トレンチ位置図 ……… 7	第 21 図	赤外線吸収スペクトル (7) …………… 17
第 8 図	花立遺跡確認調査トレンチ土層柱状図 … 7	第 22 図	実体顕微鏡写真 (1) …………… 20
第 9 図	花立遺跡 4・5 トレンチ遺構模式図 ……… 8	第 23 図	実体顕微鏡写真 (2) …………… 21
第 10 図	花立遺跡確認調査出土遺物 …………… 9	第 24 図	実体顕微鏡写真 (3) …………… 22
第 11 図	中沢遺跡推定範囲と調査対象地位置図 … 10	第 25 図	実体顕微鏡写真 (4) …………… 23
第 12 図	中沢遺跡確認調査トレンチ位置図 ……… 11	第 26 図	実体顕微鏡写真 (5) …………… 24
第 13 図	中沢遺跡確認調査トレンチ土層柱状図 … 11	第 27 図	実体顕微鏡写真 (6) …………… 25
第 14 図	鬼倉遺跡分析遺物実測図 …………… 14	第 28 図	実体顕微鏡写真 (7) …………… 26

表 目 次

第 1 表	令和元年度発掘調査工程表 …………… 1	第 2 表	鬼倉遺跡付着物観察・同定一覧表 ……… 18
-------	----------------------	-------	------------------------

写真図版目次

写真図版 1	【鬼倉遺跡】			
	調査地遠景 (南西から)	2 トレンチ土層断面 (南東から)	3 トレンチ土層断面 (南東から)	
	6 トレンチ土層断面 (南東から)	出土遺物		
写真図版 2	【花立遺跡①】			
	周辺の空中写真	調査地近景 (北東から)	調査地近景 (西から)	
写真図版 3	【花立遺跡②】			
	3 トレンチ調査風景 (南から)	6 トレンチ調査風景 (北西から)	1 トレンチ土層断面 (東から)	
	2 トレンチ土層断面 (東から)	3 トレンチ土層断面 (東から)	4 トレンチ土層断面 (西から)	
	4 トレンチ遺構確認状況 (西から)	5 トレンチ土層断面 (北から)		
写真図版 4	【花立遺跡③】			
	5 トレンチ遺構確認状況 (北から)	6 トレンチ土層断面 (西から)	出土遺物	
写真図版 5	【中沢遺跡】			
	調査地遠景 (南西から)	調査地近景 (北東から)	1 トレンチ調査風景 (南東から)	
	2 トレンチ調査風景 (南西から)	3 トレンチ調査風景 (南西から)	1 トレンチ土層断面 (南西から)	
	2 トレンチ土層断面 (北東から)	3 トレンチ土層断面 (北東から)		
写真図版 6	【鬼倉遺跡①】			
	分析遺物			
写真図版 7	【鬼倉遺跡②】			
	分析遺物			
写真図版 8	【鬼倉遺跡③】			
	分析遺物			

第 I 章 序 説

1 令和元年度事業の概要

加茂市で確認、周知されている埋蔵文化財包蔵地は 177 か所ある。これは、主として昭和 60・61 年度の七谷地区を対象に行われた東部地区詳細分布調査〔川上・長谷川ほか 1987〕と平成 7 年に新潟県教育委員会主催で主に沖積地を対象にして実施された詳細分布調査などの成果が積み上げられた結果である。その成果を基に、各種開発事業と協議、調整を行う上で不可欠な試掘・確認調査が実施されることになる。

加茂市では平成 7 年度から市内遺跡の試掘・確認調査を国庫補助事業として実施している。なお、平成 9 年から平成 19 年頃まで大規模な公共工事に伴う発掘調査が続いたが、近年は大きな開発事業がなくなり、本発掘調査には至っていない現状にある。また、既往の発掘調査で報告書が未刊行であったものについては、『加茂市史 資料編 4 考古』〔加茂市史編集委員会 2016〕に概要が記載され、未報告遺跡はひとまず解消された状態にある。

令和元年度の試掘・確認調査は、いずれも下条地区に所在する 3 遺跡（うち 1 遺跡は隣接地）を対象に実施した。鬼倉遺跡は加茂郷土地改良区が施工する農業用排水路改良工事、花立遺跡は加茂市が事業主体として行う市道建設工事、中沢遺跡が民間開発工事にそれぞれ伴うものである。

このほかに、平成 28 年度から開始している剣ヶ峰城跡の地形測量について、本年度も継続実施した。

遺跡名	調 査	調査原因	遺跡の 主な時代	月 ※現場調査期間												備考			
				4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3				
鬼倉遺跡	試掘・工事 立会い	農業用排水路 改良工事	古墳・古代									■						■	
花立遺跡	確認	道路建設工事	縄文・古代														■		加茂市事業
中沢遺跡	確認	民間開発	弥生～中世														■		
剣ヶ峰城跡	測量		中世														■		本書未収載

第 1 表 令和元年度発掘調査工程表

2 遺跡の位置と環境 (第 1 図)

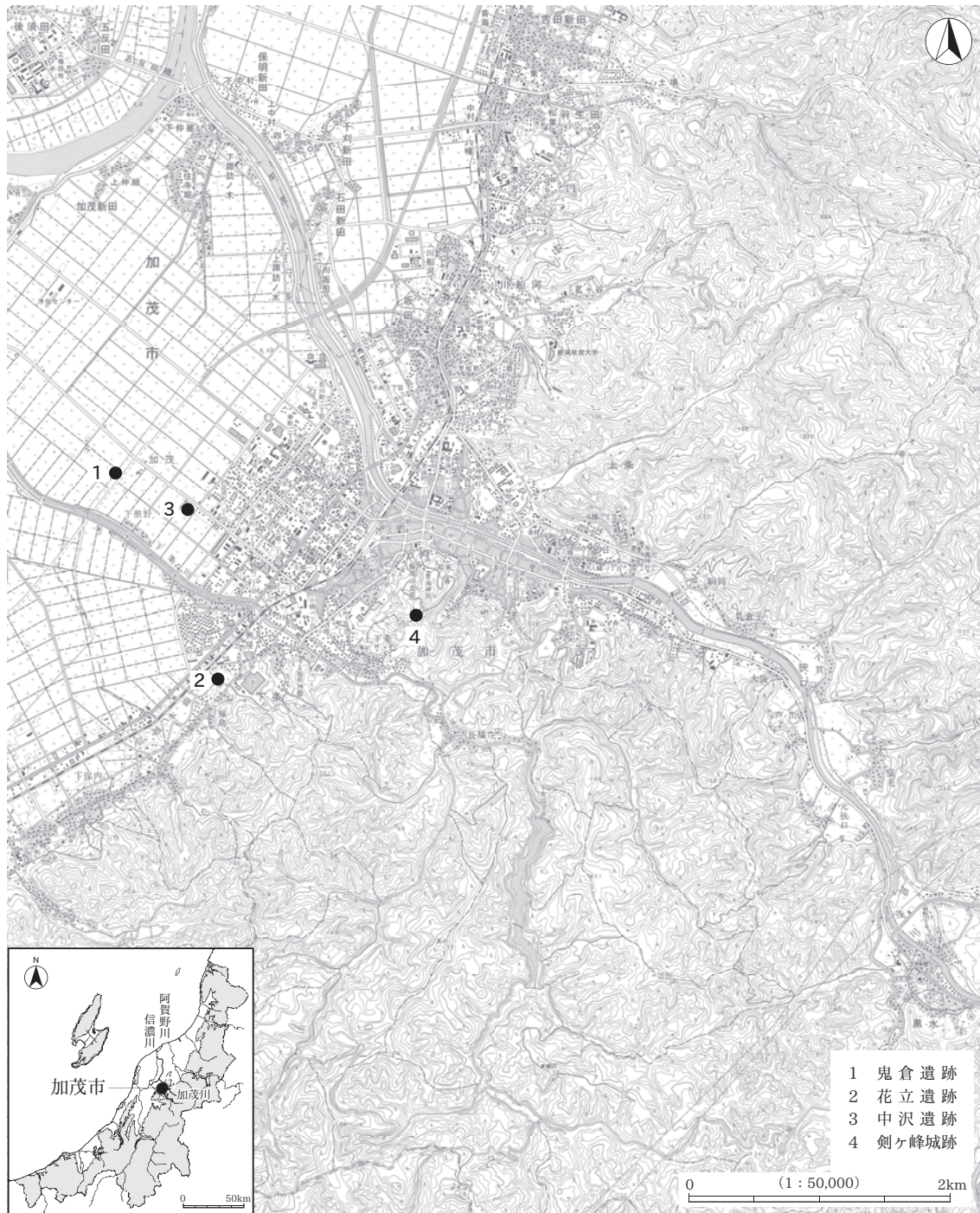
加茂市は田上町、五泉市、新潟市南区(旧、白根市)、三条市と接した新潟県のほぼ中央の県央域に位置する。地勢は東部に高さ 1,000m を超える粟ヶ岳、権ノ神岳などの山岳が聳え、粟ヶ岳を源とする加茂川が小乙川、高柳川、大谷川などの支流を集め、谷底平野を縦貫し、加茂新田地区で信濃川に合流する。加茂川の流域延長は約 11km である。

加茂川上流部は「七谷」地区と呼ばれ、加茂川およびその支流が小規模な段丘を形成し、旧石器時代～縄文時代の遺跡がその段丘上に多く分布する。一方、弥生～古代の遺跡は極めて少ない。中世になると小規模な山城や信仰関連遺物が多く確認されるようになる。一方、加茂川が東山丘陵を抜けた市街地域には扇状地形が形成され、下条川流域右岸で突如、弥生時代後期後半の集落が出現する。また、沖積地では古

2 遺跡の位置と環境

墳時代前期と後期に一段と集落が広範囲に展開し、その後若干の空白期間を挟んで、奈良・平安時代の大規模な遺跡が成立する。

鬼倉遺跡(1)は下条川下流右岸の沖積地に位置する。一面水田で、現地表面の標高は約6mである。花立遺跡(2)は東山丘陵の縁辺部で緩傾斜地に位置する。現況が畑や水田で標高は約12mである。中沢遺跡(3)は下条川右岸に位置し、一面水田で扇状地の端部にあたる。現地表面の標高は約7mである。剣ヶ峰城跡(4)は加茂城跡の西側に連なる標高110mの尾根上にある戦国期の山城である。



第1図 確認調査実施遺跡と本書関連遺跡位置図 (S=1:50,000)

(国土地理院 平成14年発行〔加茂〕・平成22年発行〔矢代田〕 S=1:25,000 原図)

第Ⅱ章 農業基盤整備事業関連

1 調査に至る経緯

令和元年度は加茂郷土地改良区による農業用排水路改良工事に伴う鬼倉遺跡の1遺跡を対象とした試掘・確認調査を行った。事業計画は事業者から9月に工事予定区域が示された。前年度施行区の延長であり、鬼倉遺跡周知範囲の外側での工事であったが、隣接していることから、施工業者が決まり次第、試掘調査を行うこととし、準備を行った。

その後、文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の着手報告について、令和元年10月21日付け民資第108号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出し、試掘調査を実施した。その結果、後述のとおり遺跡の拡がりが確認されたことから、周知遺跡範囲の変更について令和元年11月8日付け民資第116号で周知遺跡範囲の変更について新潟県教育委員会教育長宛てに通知し、文化財保護法第93条第1項の規定による埋蔵文化財発掘の届出について、加茂郷土地改良区理事長から令和元年11月11日付け加土改第150号で新潟県教育委員会教育長宛てに出され、これを受けて市教委では、埋蔵文化財の発掘について、令和元年11月13日付け民資第119号で工事立会い調査が必要であると副申した。

2 鬼倉遺跡

(1) 遺跡と試掘調査の概要(第2・3図)

鬼倉遺跡は下条川右岸の沖積地に位置する。現況は水田である。遺跡は平成7年の詳細分布調査により発見された。その後、平成9年に国道403号線バイパス建設工事に伴い約1,870m²の発掘調査が行われ、平安時代の集落跡が確認された〔伊藤2001〕。また、今回と同じ農業用排水路改良工事に伴う確認調査が、これまでに平成23・26・28・29・30年度に実施されており、合計調査面積は約108m²である。

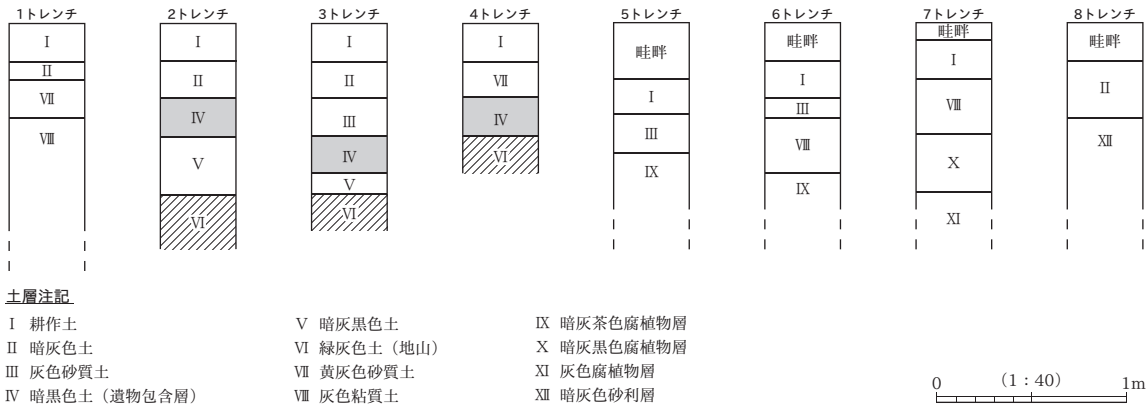


第2図 鬼倉遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:20,000)
(加茂市 平成20年印刷〔加茂市街図〕 S=1:10,000 原図)

2 鬼倉遺跡



第3図 鬼倉遺跡試掘調査トレンチ位置図 (S=1:4,000)
 (加茂市 平成17年印刷 [加茂市街図その11] S=1:2,500 原図)



第4図 鬼倉遺跡試掘調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

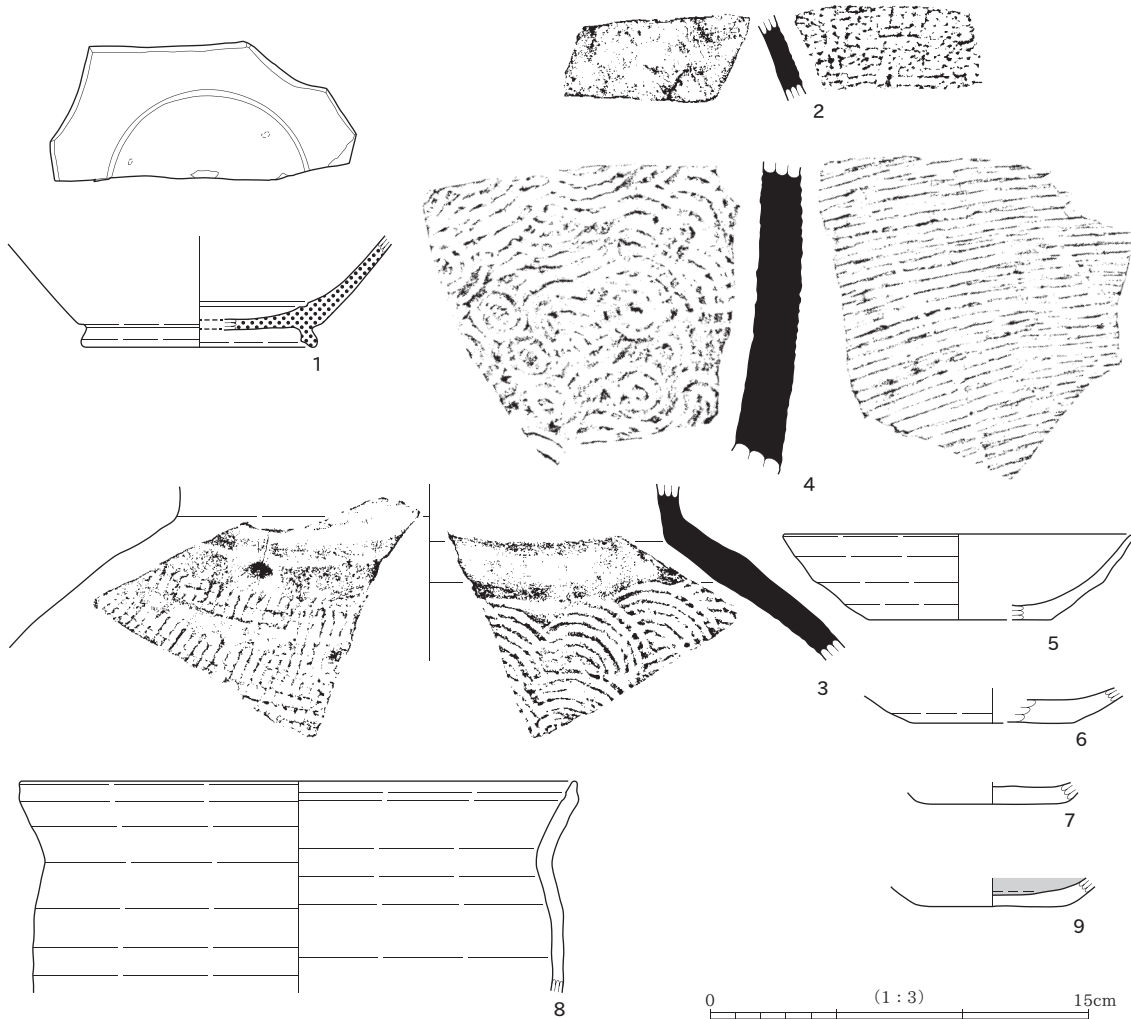
試掘調査は、令和元年10月30日に行われた。工事計画予定地内に任意にトレンチを設定し、重機により約1.3×1.7mの大きさで8か所掘削し、遺構・遺物の検出および土層堆積の確認を行った。掘削の深度は排水路改良工事の最深部を大きく超えない程度とした。なお、この調査結果を踏まえ、令和2年3月上旬に工事立会い調査を行い、遺物を収集した。

(2) 層序 (第4図)

基本土層は、各トレンチで異なるが、遺物が多数出土した2～4トレンチではI層水田耕作土の下にII層暗灰色土、III層灰色砂質土、VII層黄灰色砂質土が堆積し、その下に古代の遺物包含層と考えられるIV層暗黒色土が確認された。包含層は概ね現水田面から約40～60cmの深さにある。また、地点によりV層暗灰黒色土が堆積し、VI層緑灰色土が地山となる。5～8トレンチ周辺では腐植物層の堆積が顕著となり、低地で湿潤な地形に相当することが推測される。

(3) 遺構と遺物 (第5図)

遺構は確認されなかったが、1～4トレンチから古代の土師器・須恵器が出土し、工事立会い調査においても古代の遺物を収集した。以下、種別ごとに記載する。



第5図 鬼倉遺跡試掘調査出土遺物 (S=1:3)

1は緑釉陶器の有台碗である。比較的高く、径が大きい高台から体部が内湾気味に立ち上がる。高台は貼り付けで、下端部がやや内傾する有段輪高台である。底部内面には圈線や重焼きの支持具の三又トチンを用いた痕跡が三か所認められた。全面に淡い濃緑色の施釉がされる。高台の特徴などから近江産と考えられる。胎土は精良である。2は須恵器の横瓶、3・4は須恵器の甕で、4が新津窯産でほかは佐渡小泊窯産とみられる。5～7は土師器無台碗で、5はやや浅身で小振りなつくりである。6はやや厚手のつくりである。8は土師器小甕で、口縁端部が上方に摘み出される。9は黒色土器無台碗である。底部はケズリ後、無調整である。

(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域の1～4トレンチにおいて、明確な遺構は確認できなかったが、平安時代の遺物が多く出土したことから、これまで推測されていた鬼倉遺跡の範囲が拡がることが確認できた。土器は須恵器の食膳具が全く出土せず、土師器の食膳具が主体となる。小振りの土師器無台碗や小甕の口縁部の形などから春日編年〔春日1999〕のVII2期(10世紀中頃)に位置付けられる。緑釉陶器有台碗の年代観とも整合する。

少量の土器ではあるが、平成9年度の本調査区域で主体時期であったV2期(9世紀中頃)より降るもので、鬼倉遺跡の消長の空白期間を埋める資料として重要である。

第三章 道路建設工事関連

1 調査に至る経緯

令和元年度は加茂市道の福島線ほか道路改良事業に伴う花立遺跡を対象とした確認調査を行った。

市道福島線と市道穀町福島線は、国道403号線に接続し、住宅街から三条燕インターへ向かう車両や工場へ出入りする大型車両および近隣の小中学校へのスクールバスが通行するなど、交通量の多い路線である。しかし、線形が悪く、道幅も狭いことから車両のすれ違いが困難で、通勤や帰宅時などに渋滞が発生している状況であった。これを解消するため、当該区域にバイパスを新たに整備し、公共施設や主要路線へのアクセスの確保、通勤通学時における通行環境と生活の利便性の向上を図り、雪や災害に強く安全・安心に暮らせる地域形成を目的とし、道路建設が計画された。

平成28年末に主管課である建設課から道路改良事業の計画法線と事業概要について説明を受け、工事着手前に確認調査が必要なことを申し合わせた。平成29年末に土質ボーリング調査に伴い、工事立会いを実施した。その後も、確認調査実施に向けた協議を重ね、平成30年の協議で用地の買収後に確認調査を行うことで合意した。しかし、用地買収の進捗状況と確認調査実施可能時期などを考慮し、調査を2か年度に分けて行うこととした。

令和元年11月に土地所有者の承諾書を得て、確認調査実施の調整を進め、文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の着手報告について、令和元年12月16日付け民資第134号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。

2 花立遺跡

(1) 遺跡と確認調査の概要（第6・7図）

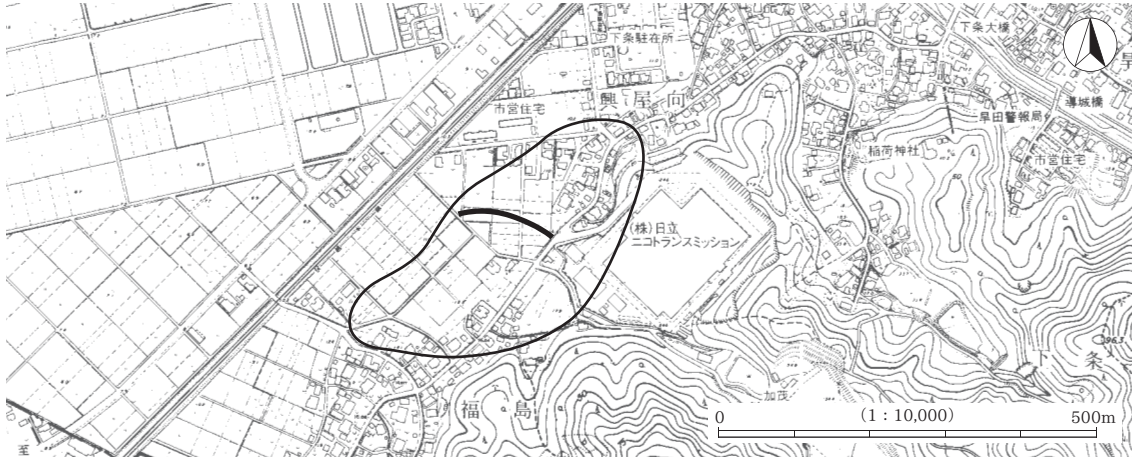
花立遺跡は下条川左岸の丘陵縁辺部で、標高約12mの微高地上に位置する。現況は、畑や水田、宅地である。遺跡の南東側の後背丘陵上には福島古墳群がある。花立遺跡は平成5年に遺跡登録され、周知化が行われた。その後、平成23・24・27年度にそれぞれ下水道工事に伴う立会い調査を行い、平安時代の土器が採取されている〔伊藤2012・2013・2016〕。

確認調査は、令和元年12月16日に行われた。道路計画予定地内（一部、残りは令和2年度実施）に任意にトレンチを設定し、重機により約2.0×3.5mの大きさを6か所掘削し、遺構・遺物の検出および土層堆積の確認を行った。調査終了後は掘削土で埋戻し、重機で転圧を行った。

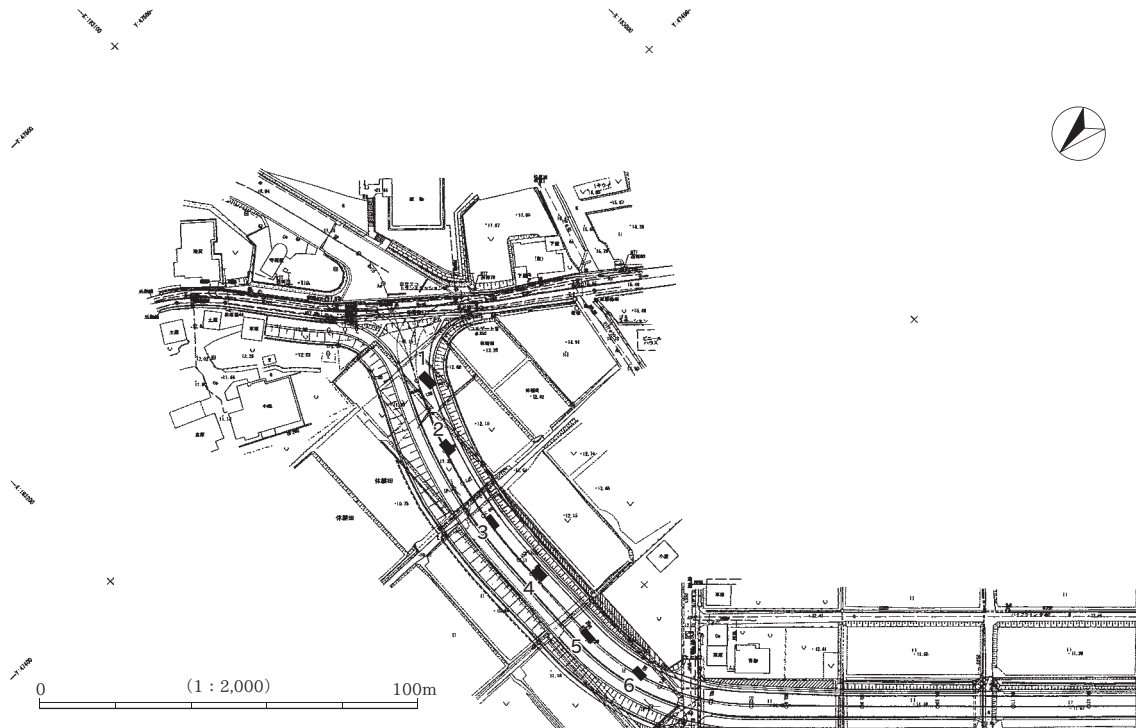
(2) 層序（第8図）

層序は各トレンチで異なる状況であるが、Ⅰ層水田耕作土、Ⅱ層暗灰茶色粘質土、Ⅲ層暗灰黒色土、Ⅳ層青灰色砂質土を基本とし、Ⅲ層が古代の遺物包含層、Ⅴ層が遺構確認面である。1トレンチではⅣ層青色砂利層、5トレンチではⅥ層黄灰色砂質土が地山面となる。6トレンチはほかと異なり、Ⅶ層黄灰色土、Ⅷ層暗灰色砂利層から多量の土器が出土し、何らかの遺構覆土の可能性がある。

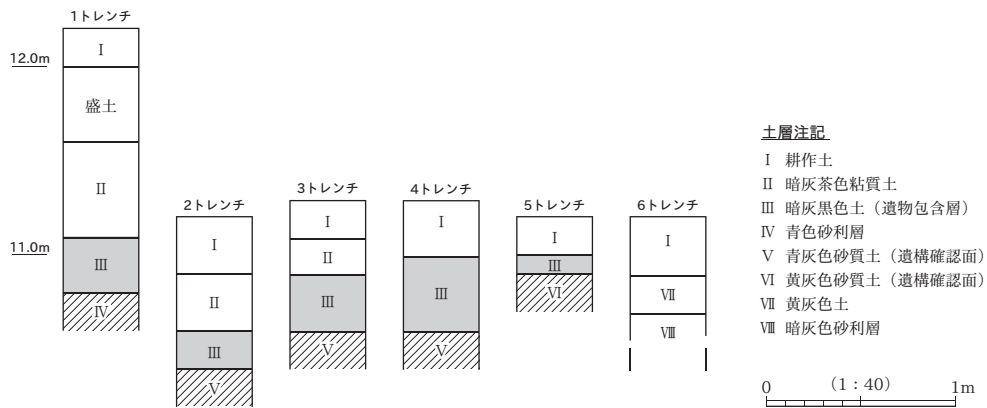
1トレンチでは盛土も認められたことから、現地表面下約120cmの深さから古代の土器が出土したが、



第6図 花立遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:10,000)
 (加茂市 平成20年印刷(加茂市街図) S=1:10,000 原図)

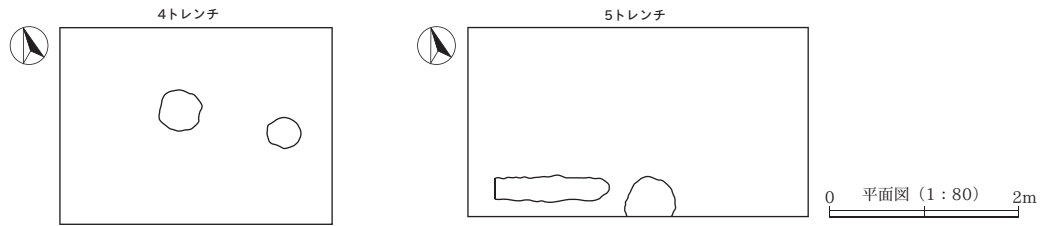


第7図 花立遺跡確認調査トレンチ位置図 (S=1:2,000)
 (加茂市建設課提供 S=1:500 原図)



第8図 花立遺跡確認調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

2 花立遺跡



第9図 花立遺跡4・5トレンチ遺構模式図 (S=1:80)

ほかは水田面から約20～60cmの深さに遺物包含層が存在する。

(3) 遺構と遺物 (第9・10図)

4トレンチと5トレンチで遺構が確認された。4トレンチでは直径約30～40cmの円形のピットが2基、5トレンチでは直径約50cmの円形のピットが1基と幅約20～30cmの溝が1条である。

遺物はすべてのトレンチから出土した。1トレンチが土師器2点、2トレンチが土師器14点・須恵器1点、3トレンチが土師器11点・須恵器1点、4トレンチが土師器46点・須恵器6点・縄文土器1点、5トレンチが土師器16点・須恵器8点、6トレンチが土師器71点・須恵器37点・石製品1点の合計で、土師器160点・須恵器53点・縄文土器1点・石製品1点である。以下、主なものを掲載する。

1は縄文土器で深鉢の口縁部片である。C字の竹管文が見られ、中期前葉頃に位置付けられる。

2～14は須恵器で、2は杯蓋、3は有台杯。4は口縁部の屈曲した杯で、天地が逆の可能性もある。5～11が無台杯、12が鉢、13・14は甕である。11の底部は回転糸切り痕を残す。また、明確に判読できないが、底部外面に「干」と読めそうな墨書がある。2～10の須恵器は佐渡小泊窯産、11は信濃川左岸窯産、12～14の貯蔵具が新津窯産である。

15～19は土師器で、15が無台椀、16が長甕の底部、17が小甕、18・19が鍋で口縁端部を少し上方に摘み出す。体部にはカキメが見られる。

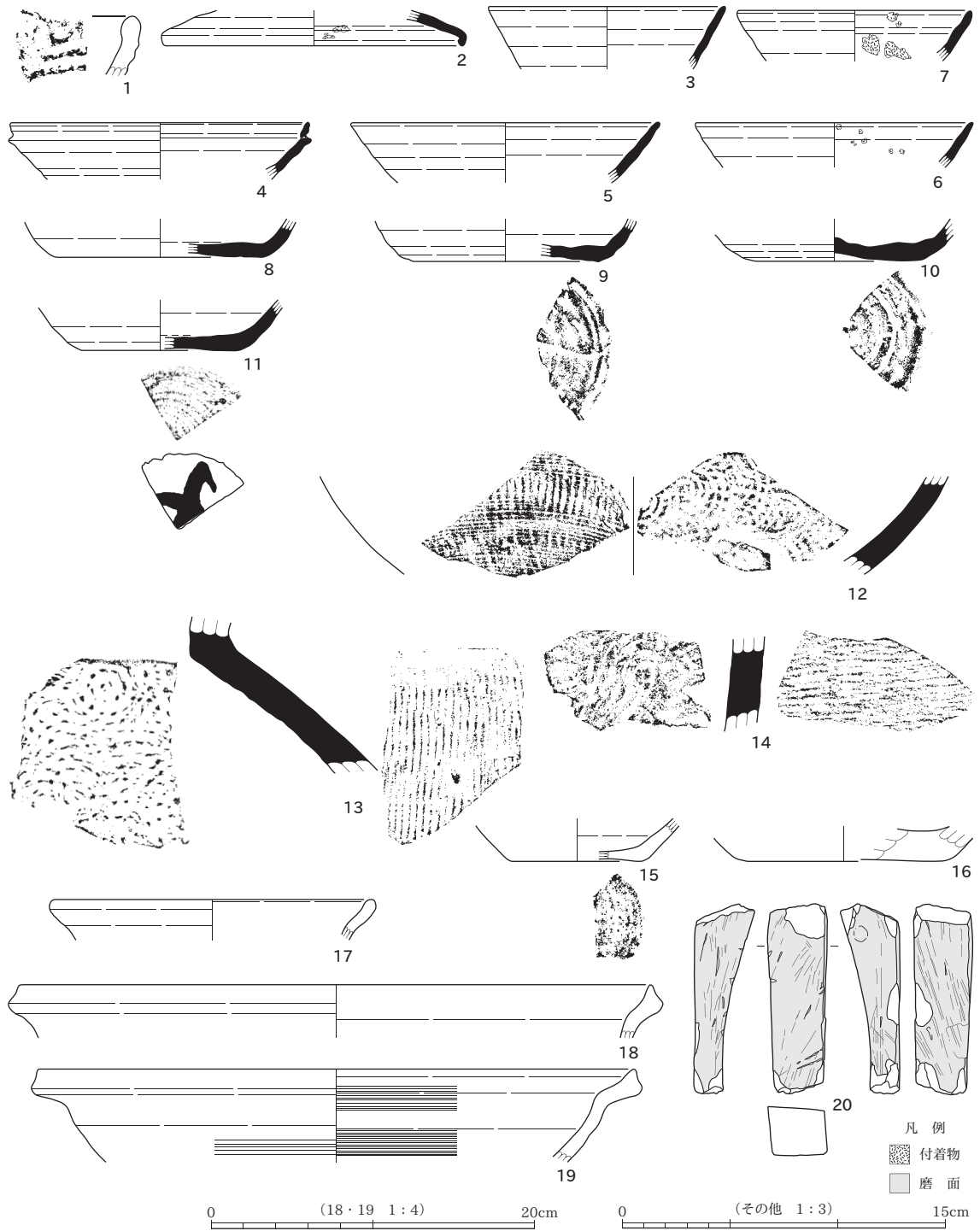
20は凝灰岩製の砥石である。直方体で4面に砥面を持つ。

(4) 調査のまとめ

1～6トレンチから平安時代を主体とした土器が出土し、4・5トレンチでは柱穴の可能性のあるピットも検出されたことから、平安時代の集落跡が存在する可能性が高い。

土器の年代は土師器の食膳具が少なく、須恵器の食膳具が主体となることや小泊窯跡の須恵器から春日編年〔春日1999〕のV2期(9世紀中頃)に位置付けられる。

以上から、該当区域一帯において記録保存のための本発掘調査が必要と判断される。調査必要区域については令和2年度実施の残りの用地内での確認調査の結果もふまえて判断したい。



第10図 花立遺跡確認調査出土遺物

第IV章 民間開発関連

1 調査に至る経緯

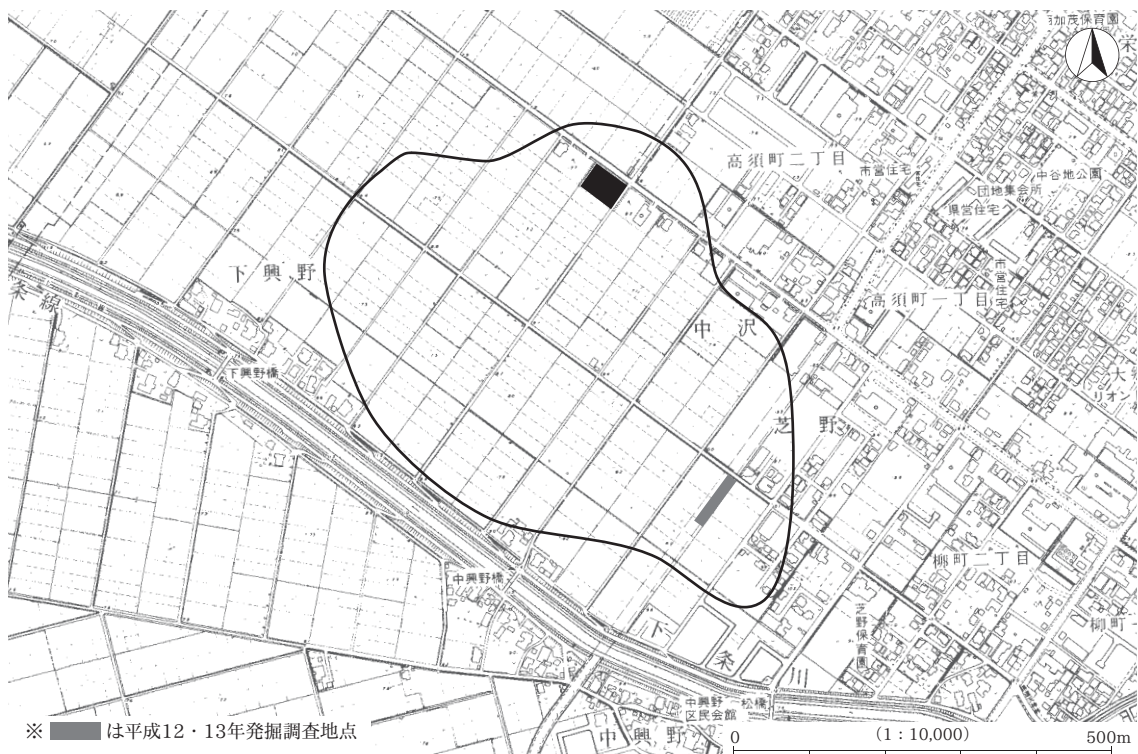
令和元年10月29日付けで株式会社エステートコンサルタントから「埋蔵文化財包蔵地試掘調査依頼」が市教委宛てに提出された。場所は同社所有地の芝野地内で、具体的な開発計画は未定ながら、今後の土地取引と開発計画が想定されるところであり、該当地が周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内であったことから、以前から相談を受けていた経緯があった。この依頼文を受けて、市教委では確認調査実施の調整を進めた。

その後、準備が整い、文化財保護法第99条第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の着手報告について、令和元年12月16日付け民資第135号で新潟県教育委員会教育長宛てに提出した。

2 中沢遺跡

(1) 遺跡と確認調査の概要 (第11・12図)

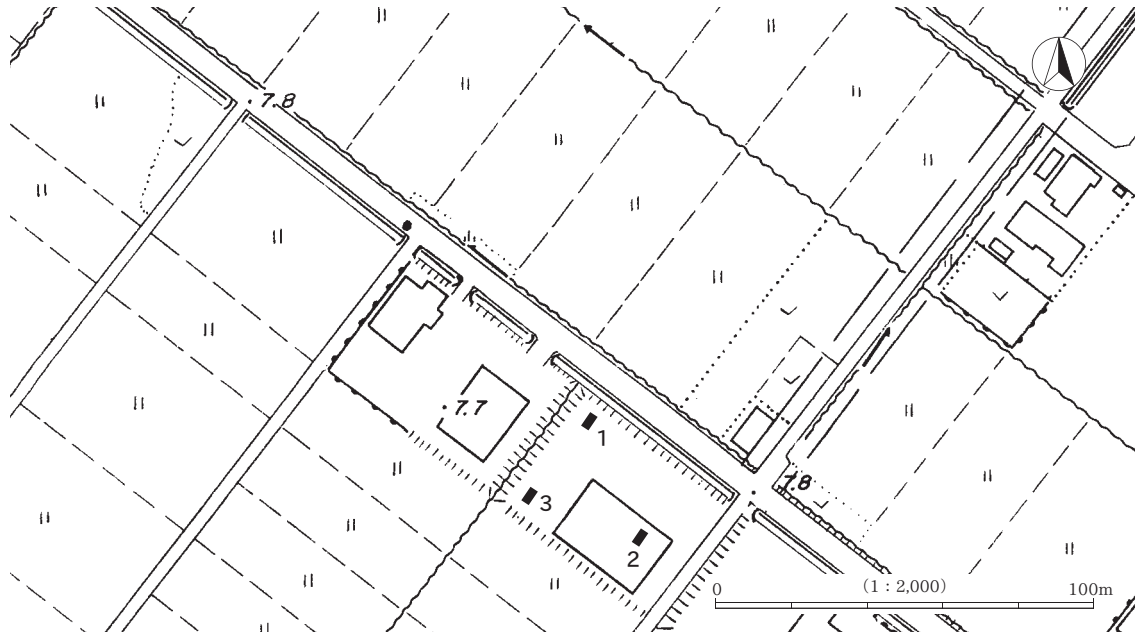
中沢遺跡は下条川下流域右岸、標高約7～9mの扇状地形の先端部付近から沖積低地にかけて広がる。平成11～13年に本発掘調査が行われ、弥生時代後期と奈良・平安時代の集落が確認されている〔加茂市2016〕。また、中沢遺跡は市街地に近いこともあり、平成8年以降から各種の開発事業が計画



※ ■ は平成12・13年発掘調査地点

第11図 中沢遺跡推定範囲と調査対象地位置図 (S=1:10,000)

(加茂市 平成20年印刷〔加茂市街図〕 S=1:10,000 原図)



第12図 中沢遺跡確認調査トレンチ位置図 (S=1:2,000)
 (加茂市 平成17年印刷 [加茂市街図その11] S=1:2,500 原図)

され、工事立会いや確認調査が繰り返し行われている〔伊藤2014ほか〕。今回の調査対象地は遺跡の北端部付近に位置する。

確認調査は、令和元年12月23日に行われた。調査対象地内に任意にトレンチを設定し、削岩機で舗装を除去した後、重機により約2.0×4.0mの大きさで3か所掘削し、遺構・遺物の検出および土層堆積の確認を行った。

(2) 層序 (第13図)

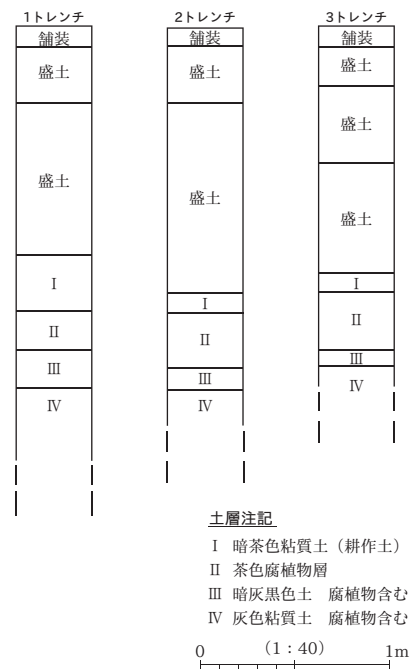
調査地の現状は約1.1～1.3mの厚い盛土の上が舗装されていた。盛土の下の基本土層は、I層水田耕作土、II層茶色腐植物層、III層暗灰黒色土(腐植物が混入)、IV層灰色粘質土(腐植物が混入)で、腐植物層の堆積が顕著であった。低湿地の環境と推測される。

(3) 遺構と遺物

遺構・遺物ともに確認されなかった。

(4) 調査のまとめ

今回の調査対象区域において遺跡は確認できず、工事による埋蔵文化財への影響はないものと判断される。



第13図 中沢遺跡確認調査トレンチ土層柱状図 (S=1:40)

第V章 鬼倉遺跡出土須恵器・土師器・木製品 付着物の科学分析

漆器文化財科学研究所 四柳 嘉章

1 はじめに

新潟県加茂市鬼倉遺跡は、下条川右岸の沖積低地に立地する、古墳時代および古代の遺跡である。今回は9世紀前半を中心とした55点の須恵器・土師器・木製品(第14図)に付着した漆、黒色付着物の赤外分光分析と表面の実体顕微鏡観察を行ったので、以下に報告する。

2 分析の方法と結果

考古学者が肉眼で漆か炭化物(煤)の識別する点を考慮して、表面の実体顕微鏡写真を作成した。そのうえで代表的なものおよび肉眼で識別しがたいものについてフーリエ変換赤外分光(FT-IR)を実施した。両者の所見を第2表の付着物観察・同定一覧表に掲載した。

(1) 赤外分光分析(第15～21図)

固有の振動をしている分子に波長を連続的に変化させて普通赤外線(波数 $4000\sim 400\text{cm}^{-1}$ 、波長 $2.5\sim 25\mu\text{m}$)を照射すると、分子の固有振動と同じ周波数の赤外線が吸収されて、分子構造に応じたスペクトルが得られる。この解析方法が赤外分光分析(赤外線吸収スペクトル法)で、フーリエ変換赤外分光法(FT-IR)を用いた。波数は 1cm 当たりの波の数で、振動数を光速で割ったものであり、波長の逆数である。試料は 2mg を採取しKBr(臭化カリウム) 100mg をメノウ鉢で磨り潰して、これを錠剤成形器で加圧成形した錠剤法を用いた。条件は分解能 4cm^{-1} 、積算回数16、アポダイゼーション関数Cosine。第15～21図はその赤外線吸収スペクトル(すべてノーマライズ)で、縦軸は吸光度(Abs)、横軸は波数(cm^{-1} 、カイザー)である。測定機器は日本分光製FT-IR4600。

第15図はNo.4・7・8・14(外底面)・36(外底面)の赤外線吸収スペクトルで、漆の基準データは岩手県浄法寺産精製漆(①)である。全体として漆同定要素である、 2925cm^{-1} (炭化水素の非対称伸縮振動)、 2850cm^{-1} (炭化水素の対称伸縮振動)、 $1720\sim 1710\text{cm}^{-1}$ (カルボニル基)、 $1630\sim 1620\text{cm}^{-1}$ (糖タンパク)、 1465cm^{-1} (活性メチレン基)、 1280cm^{-1} (フェノール)、 $1070\sim 1030\text{cm}^{-1}$ (ゴム質)の吸収が認められ、若干漆ゴム質の増大が見られるが、古代例としては標準的なパターンといえる。

第16図はNo.12(外底面)の赤外線吸収スペクトルで、 1280cm^{-1} (フェノール)の吸収が減少し、第15図と比較して 1320cm^{-1} 付近のショルダーが増大している例であるが、漆同定要素を十分満たしている。

第17図はNo.16(外底面)・22(外底面)・34(外底面)・44(内面)の赤外線吸収スペクトル。 $1630\sim 1620\text{cm}^{-1}$ (糖タンパク)が増大し、 1280cm^{-1} (フェノール)の吸収が減少し全体にブロードとなっているが、漆同定要素を満たしている。

第18図はNo.1(内面)・9(内面)の赤外線吸収スペクトルで、 $1070\sim 1030\text{cm}^{-1}$ (漆ゴム質)の吸収が増大し、やや劣化が見られる典型例である。内面漆塗り須恵器。

第19図は劣化漆の基準データである新潟県三光寺遺跡(①漆パレット、15世紀)、新潟県道下遺跡(②漆パレット、10世紀)とNo.41(外面)・43(外面)・50(内面)の赤外線吸収スペクトル。No.41・43・50ともに劣化漆ではなく炭化物であるが、同定は不可能。なお、基準データの①②は、紫外線劣化であれば、 2925cm^{-1} (炭化水素の非対称伸縮振動)、 2850cm^{-1} (炭化水素の対称伸縮振動)の吸収が減少し、逆に $1720\sim 1710\text{cm}^{-1}$ (カルボニル基)の吸収は増大するが、極端な反比例は認められない。

第20図は曲物であるNo.54・55(内面)の赤外線吸収スペクトルで、劣化漆の基準データである新潟県道下遺跡(②漆パレット、10世紀)の吸収を重ねたもの。No.55は 1280cm^{-1} (フェノール)の吸収が極端に減少し全体にブロードとなっているが、No.54とともに劣化漆と判断される。

第21図はNo.3・5・29(体部内面)の赤外線吸収スペクトルに、木炭(①)の吸収を重ねたもので、 1379cm^{-1} 付近に特徴的な吸収が見られる。炭化物の由来はさまざまであり、日本分光KKの研究スタッフと様々な検討を行ったが、特定にはいたらなかった(木材由来の煤の可能性を検討中)。

(2) 実体顕微鏡観察(第22～28図)

肉眼で識別する最低条件は、塗膜が形成されていること、生漆や厚く塗った場合などに特徴的な縮状態(縮皺)が見られることである。紫外線や経年変化によってさまざまな変化が見られるが、炭化状態の多くは木材由来の煤などが考えられる。油煙や松煙の場合は光沢がある。

第22～28図から肉眼で漆と識別できるものは以下である(第2表所見の項参照)。

No.1、4、5、6、7、8、9、10、11、12、13、14、15、16、17、19、21、22、23、26、28?、30?、34(底部)、35?、36、37?、38?、39、40?、42、44、45?、46?、50、54、55

以上の個体に対して、20点の赤外分光分析を実施し、第2表において所見を掲載した。

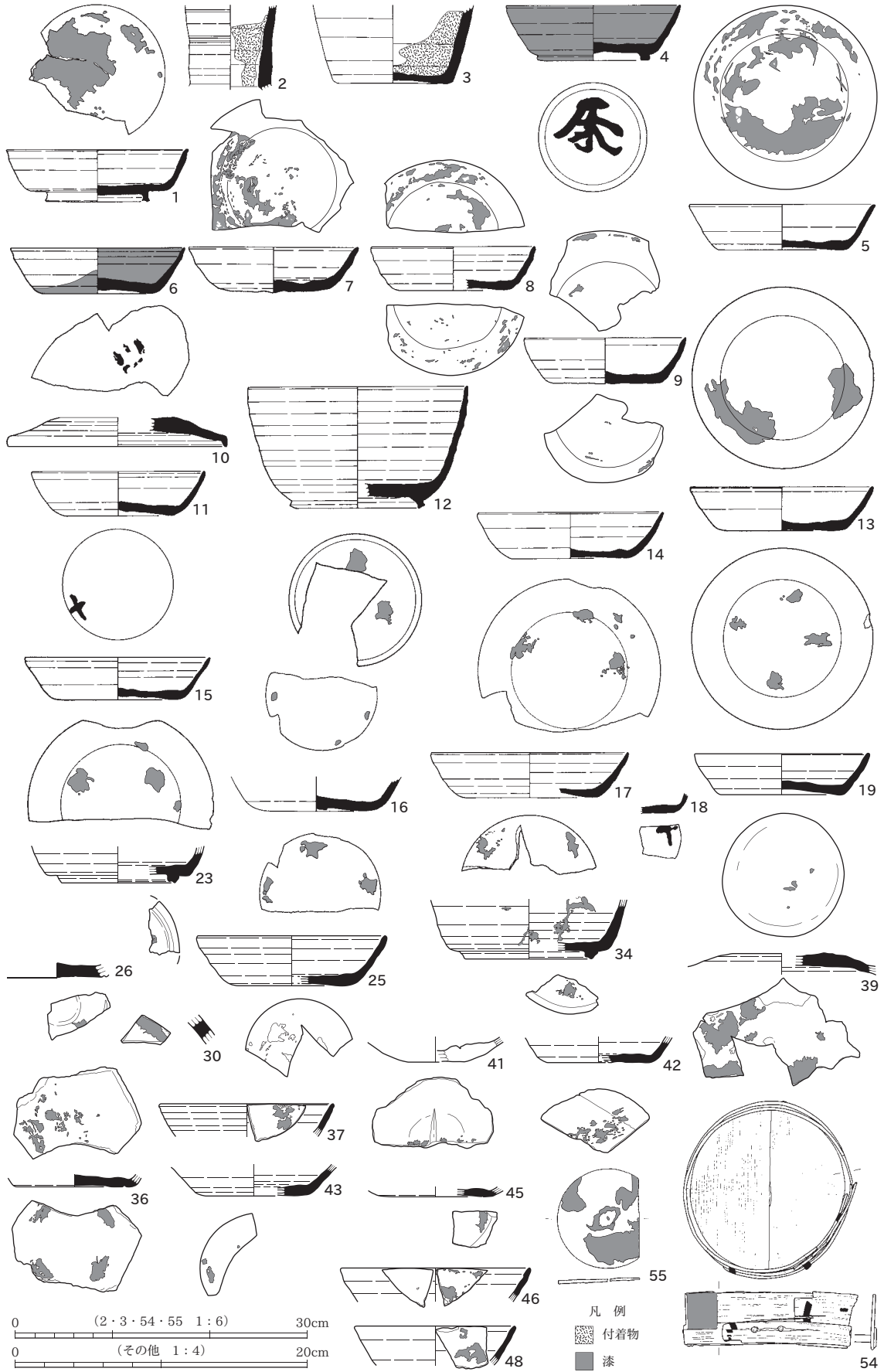
3 おわりに

鬼倉遺跡は官衙関連遺跡に匹敵する銭貨、石帯、獣脚、銅鏡などの遺物も出土しているが、建物の規模と墨書土器の内容からみて開発領主層の遺跡と考えられている¹⁾。分析を行った大半が漆と判断され、漆作業を示す漆パレットや漆容器も見つかっていることから、貴重な漆を管理できた階層であることを示している。

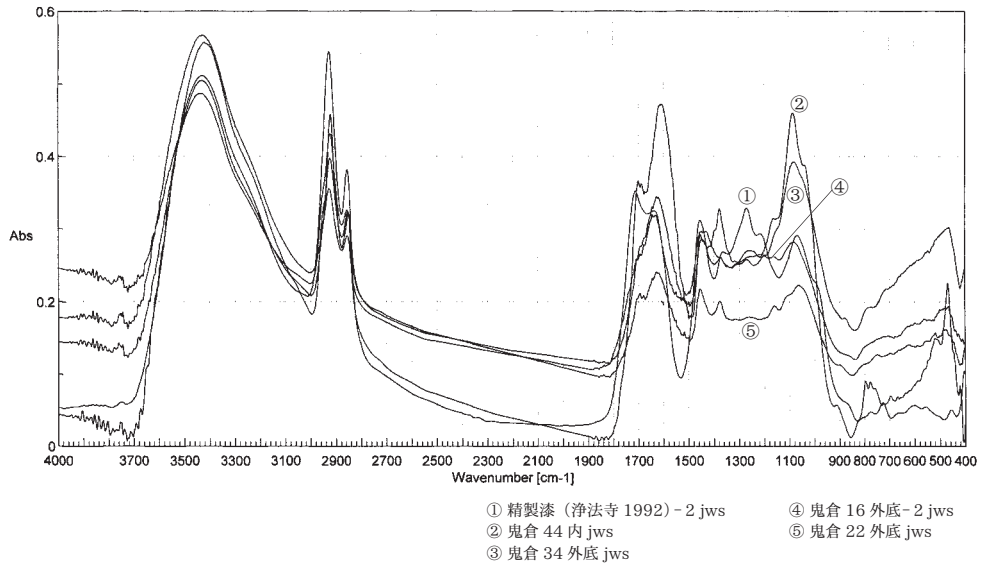
漆器の代用品とも考えられる内面あるいは内外面漆塗須恵器杯のうち、多くは外底面に四方拝?を示すかのような記号様の漆書があることは興味深い。加茂市馬越遺跡²⁾の須恵器無台杯では、外底面に斑点状に付着し(8点)、有台杯では外面に垂下ないし斑点状に付着していた(3点)。また土師器と須恵器では用途が使い分けされていた。9世紀末～10世紀前半段階ではかなりのパレットと漆器が確認できたが、鬼倉遺跡はこれに先行する事例として重要といえる。

曲物は実見および報告したものでは、官衙関連遺跡や在地開発領主層の遺跡と考えられている旧笹神村発久遺跡³⁾、旧神林村樋渡遺跡・堀下遺跡⁴⁾、加茂市馬越遺跡⁵⁾、長岡市上条遺跡⁶⁾に好例がある。一般集落では所持しないものであることは言うまでもない。

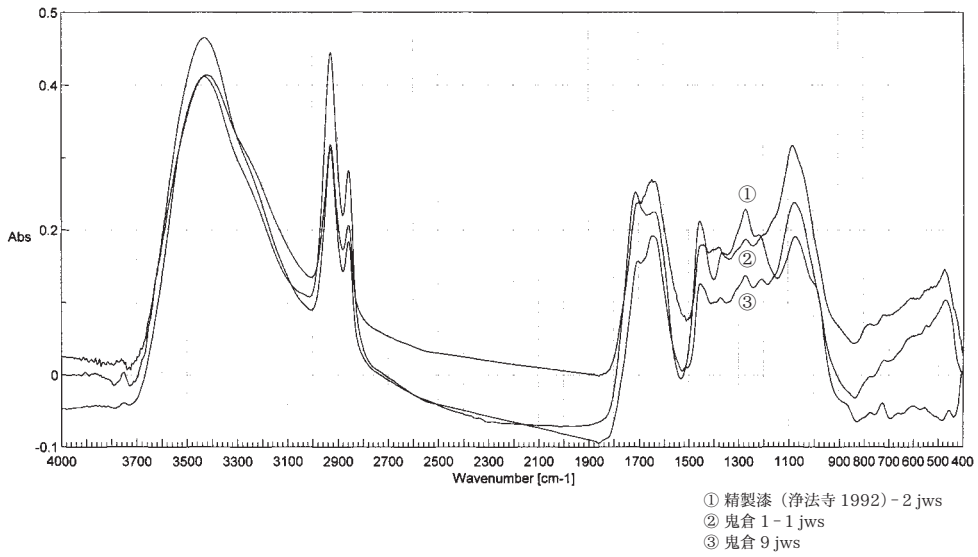
生産量に限りある貴重な漆は、律令国家では中男作物・交易雑物・諸国年料として漆を貢納させた。地方の官衙は単に漆の集荷だけではなく漆器の生産を行っていたことが明らかになっている⁷⁾。越後では漆および漆器を生産管理した官衙関連遺跡や開発領主層の遺跡が多く、前述の発久遺跡以外で分析報告させていただいた。ご参照いただければ幸いです。



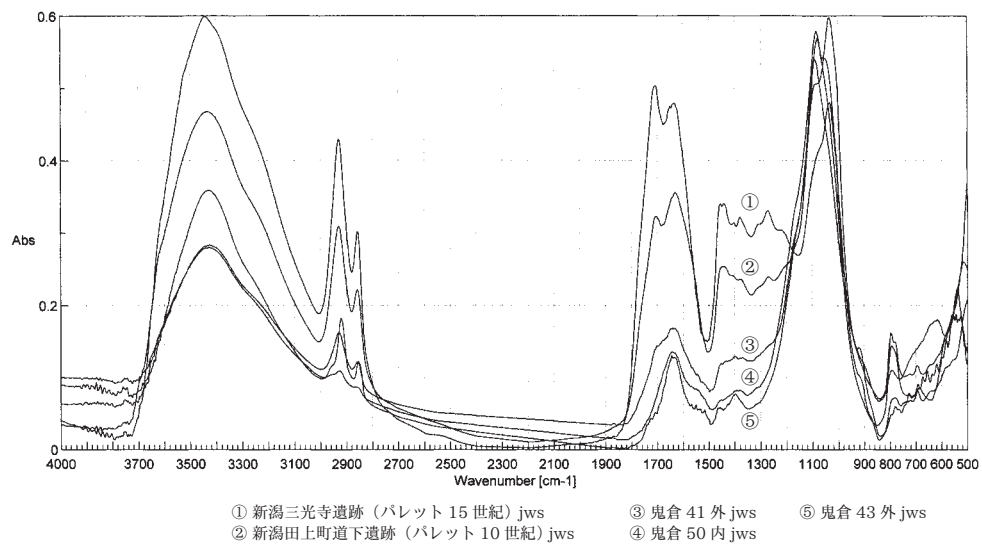
第14図 鬼倉遺跡分析遺物実測図



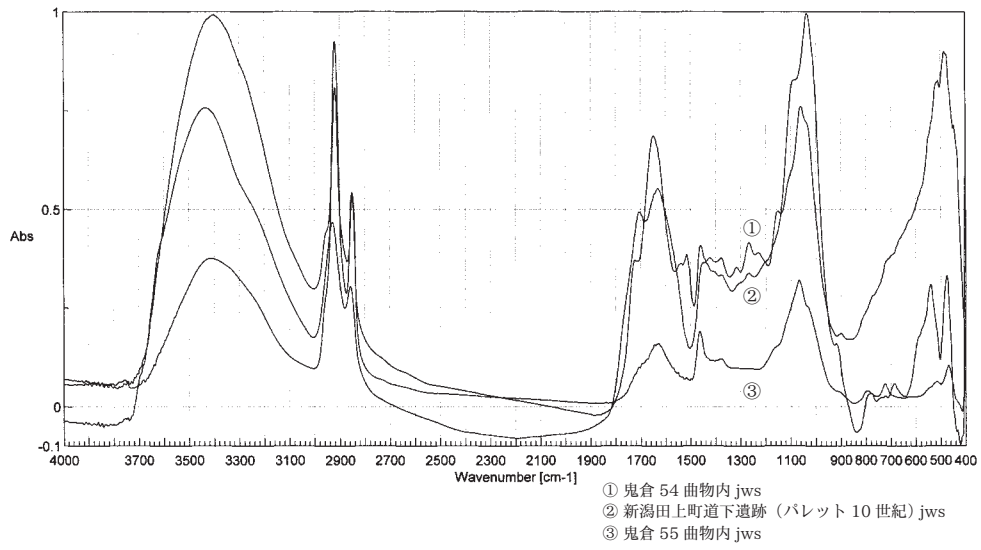
第 17 図 赤外線吸収スペクトル (3)



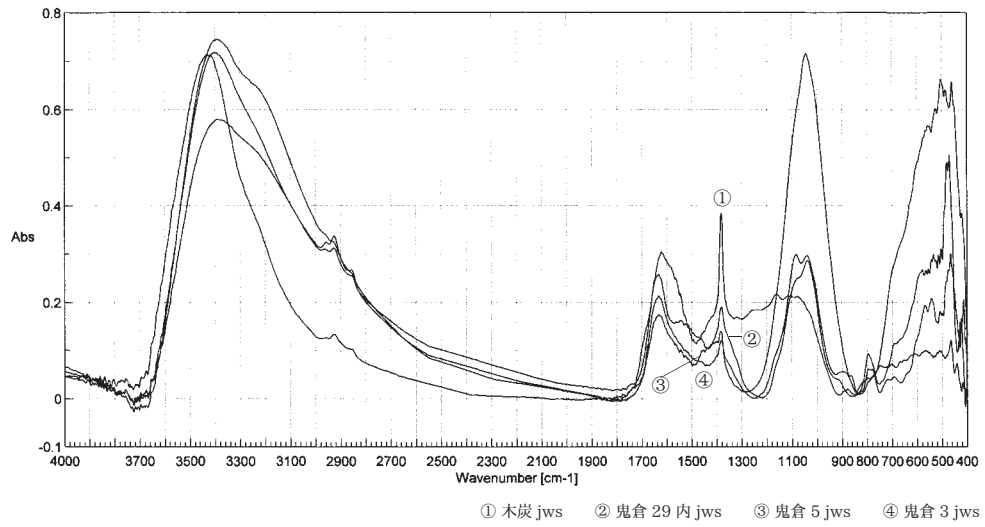
第 18 図 赤外線吸収スペクトル (4)



第 19 図 赤外線吸収スペクトル (5)



第 20 図 赤外線吸収スペクトル (6)



第 21 図 赤外線吸収スペクトル (7)

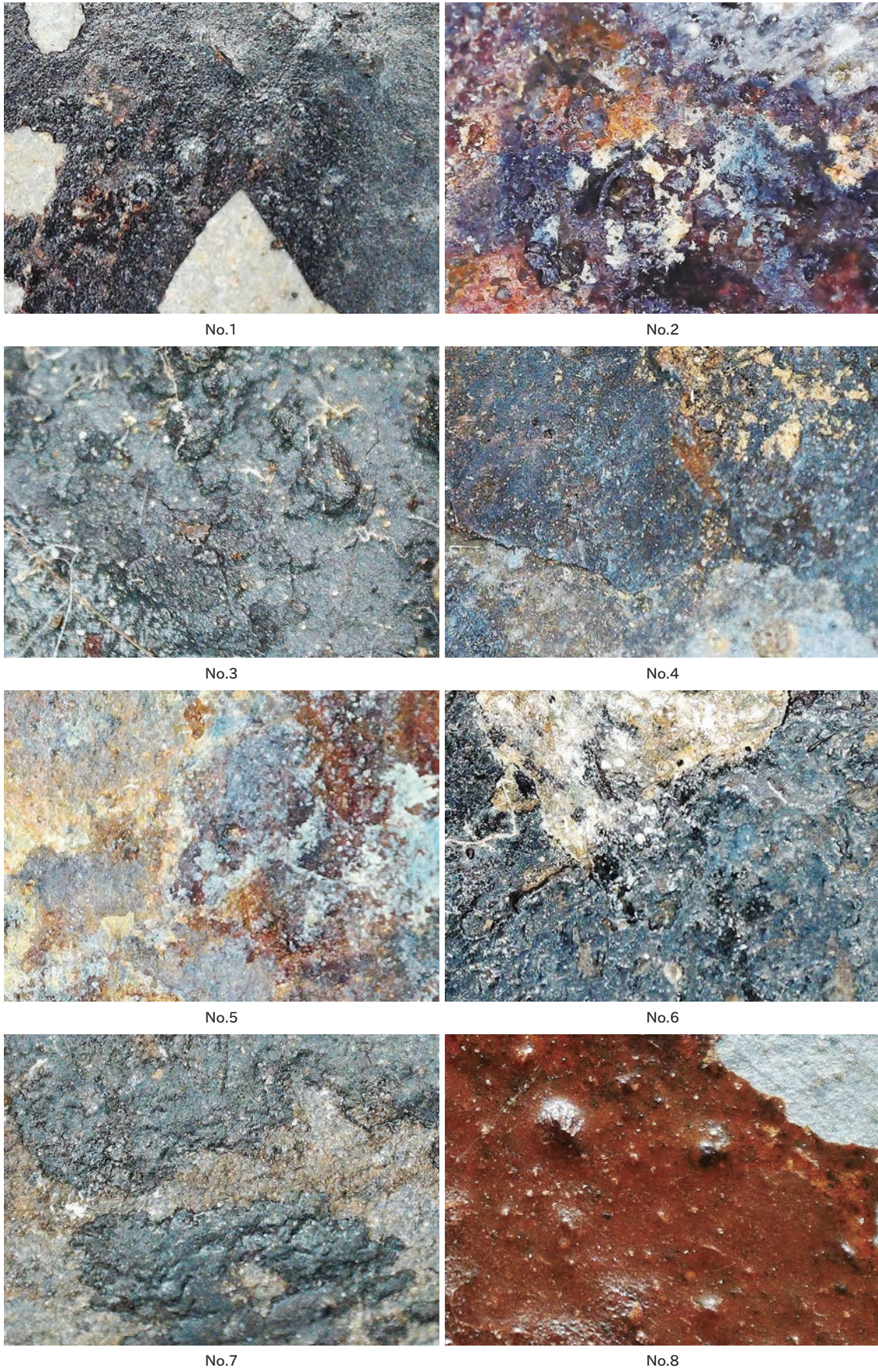
3 おわりに

No.	図版	器種	付着物状況・実体顕微鏡観察所見	FT-IR	時期
1	22	須恵器 有台杯	外底面～体部内面にかけて黒色塗膜が付着しており、内面は「漆塗り」である。	漆	8世紀中葉
2	22	須恵器 長頸瓶	頸部内面にわずかに茶黒色炭化物が付着。	?	〃
3	22	須恵器 広口壺	外底面～体部内面にかけて光沢のない暗褐色付着物あり。	木炭煤?	〃
4	22	須恵器 有台杯	内外面全体に、茶色の均一な暗黒色塗膜があり、「漆パレット」である。	漆	9世紀前半
5	22	須恵器 無台杯	体部内面全体に茶色の均一な塗膜があり、「漆塗り」である。	漆?	〃
6	22	須恵器 無台杯	外底面～体部内外面にかけて、黒色塗膜が付着しており、内外面「漆塗り」である。	漆	〃
7	22	須恵器 無台杯	外底面～体部内外面にかけて、やや光沢のない均一な暗黒色塗膜があり、内面は「漆塗り」である。	漆	〃
8	22	須恵器 無台杯	外底面～体部内面にかけて均一な茶色付着物があり、内面は「漆塗り」である。	漆	〃
9	23	須恵器 無台杯	外底面～体部内外面にかけて、均一な茶色塗膜があり、内面は「漆塗り」である。	漆	〃
10	23	須恵器 杯 蓋	蓋天井部外面に黒色付着物あり。未分析だが塗膜色や均一な塗膜からみて漆と判断される。	未分析	〃
11	23	須恵器 無台杯	外底面に光沢のない均一な暗黒色塗膜と縮状態が確認できるので、「漆書」（記号、以下同じ）と判断される。	未分析	〃
12	23	須恵器 有台杯	外底面に光沢のある均一な黒色塗膜があり、「漆書」である。内面にも漆と思われる痕跡が残る。	漆	〃
13	23	須恵器 無台杯	外底面に光沢のある均一な茶黒色塗膜があり、「漆書」。内面には均一な茶黒色塗膜があり、「漆塗り」である。	未分析	〃
14	23	須恵器 無台杯	外底面～体部内外面、口縁部にかけて黒色塗膜がある。外底面は「漆書」である。	漆	〃
15	23	須恵器 無台杯	外底面は「漆書」、内面は部分的だが光沢のある均一な黒色塗膜があり「漆塗り」の可能性はある。	漆	〃
16	23	須恵器 無台杯	外底面は「漆書」、内面は部分的だが光沢のある均一な黒色塗膜痕があり「漆塗り」の可能性はある。	漆	〃
17	24	須恵器 無台杯	外底面は光沢のある均一な茶黒色塗膜であり「漆書」である。	未分析	〃
18	24	須恵器 無台杯	外底面は「漆書」、内面は部分的だが光沢のある均一な黒色塗膜痕があり「漆塗り」の可能性はある。	未分析	〃
19	24	須恵器 無台杯	外底面はごく微量だが光沢のある茶黒色塗膜で、縮状態から「漆書」と判断される。	未分析	〃
20	24	須恵器 長頸瓶	外底面～体部内外面にかけて、やや光沢のある黒色炭化物が付着。	未分析	〃
21	24	須恵器 無台杯	外底面に均一な茶色塗膜があり、縮状態から漆と判断される。	未分析	9世紀前半
22	24	土師器 小 甕	外底面～体部内外面にかけて、光沢のある黒色塗膜がある。内面の縮状態からみて「漆容器」の可能性はある。	漆	〃
23	24	須恵器 有台杯	外底面は光沢のある黒色塗膜であり、縮状態から「漆書」と判断される。	未分析	〃
24	24	土師器 小 甕	体部内面に部分的に黒色炭化物が付着。	未分析	〃
25	25	須恵器 無台杯	外底面の茶色付着は漆の可能性はある。	未分析	〃
26	25	須恵器 無台杯	外底面は光沢のある黒色塗膜であり、縮状態から「漆書」と判断される。	未分析	〃
27	25	土師器 小 甕	外底面に茶黒色炭化物が付着。	未分析	〃
28	25	須恵器 無台杯	外底面～体部内外面にかけて、茶黒色塗膜が付着。かなり劣化しているが漆の可能性はある。	未分析	〃

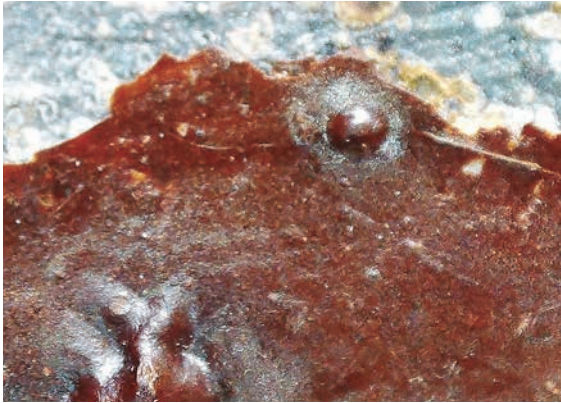
第2表 鬼倉遺跡付着物観察・同定一覧表(1)

No.	図版	器種	付着物状況・実体顕微鏡観察所見	FT-IR	時期
29	25	須恵器 横 瓶	体部内面に黒色炭化物が付着。	木炭煤?	〃
30	25	須恵器 長頸瓶	体部外面に薄く、黒色塗膜があり漆の可能性はある。	未分析	〃
31	25	土師器 長 甕	体部内外面に黒色炭化物が付着しているが、漆の可能性はある。	未分析	〃
32	25	土師器 無台椀	体部内外面に茶黒色炭化物が付着。	未分析	〃
33	26	須恵器 無台杯	体部内面に薄く黒色付着物があるが、内面「漆塗り」の可能性はある。	未分析	〃
34	26	須恵器 有台杯	外底面に茶色塗膜があり、劣化しているが「漆書」と判断される。内面は「漆塗り」の可能性はある。	漆	〃
35	26	須恵器 無台杯	体部内外面に薄く黒色付着物がある。均一な塗膜であることから、漆の可能性はある。	未分析	〃
36	26	須恵器 無台杯	体部内面は「漆塗り」の可能性はある。外底面は「漆書」である。	漆	〃
37	26	須恵器 有台杯	口縁部内面に薄く均一な黒色塗膜があり、漆の可能性はある。	未分析	〃
38	26	須恵器 無台杯	外底面～体部内外面にかけて、縮みのある黒色塗膜があることから、内外面「漆塗り」の可能性はある。	未分析	〃
39	26	須恵器 杯 蓋	蓋内面全体に薄い黒色塗膜があり、全体が「漆塗り」の可能性はある。	漆	〃
40	27	土師器 長 甕	体部外面に茶黒色塗膜があり、部分的に縮状態もあることから、漆の可能性はある。	未分析	〃
41	27	土師器 椀	外底面に黒色付着物があり、FT-IRでは劣化した漆の可能性はある。	漆?	古墳後期?
42	27	須恵器 無台杯	外底面に縮みのある黒色塗膜が付着。	漆	9世紀前半
43	27	須恵器 無台杯	外底面に漆と判断される黒色塗膜が付着。	漆?	〃
44	27	須恵器 無台杯	外底面～体部内外面にかけて、縮みのある茶黒色塗膜が付着。かなり劣化しているが内外「漆塗り」の可能性はある。	漆	〃
45	27	須恵器 無台杯	外底面に縮みのある黒色塗膜が付着しており、漆の可能性はある。	未分析	〃
46	27	須恵器 無台杯	口縁部内外面に薄く茶黒色塗膜が付着しており、漆と判断される。	未分析	〃
47	27	須恵器 無台杯	外内面～体部内外面にかけて、茶黒色塗膜が付着。かなり劣化しているが漆の可能性はある。	未分析	〃
48	28	須恵器 無台杯	口縁部内面に薄く茶黒色物が付着。かなり劣化しているが漆の可能性はある。		〃
49	28	土師器 小 甕	外底面～体部内面にかけて、茶黒色炭化物が付着。	未分析	〃
50	28	土師器 小 甕	体部内面にかけて、全体に薄く茶黒色物が付着しており、「漆塗り」の可能性はある。外面も部分的に近似した付着物がみられる。	木炭煤?	〃
51	28	土師器 小 甕	体部内面にかけて、全体に薄く暗褐色物が付着しており、「漆塗り」の可能性はある。	未分析	〃
52	28	土師器 小 甕	体部内面にかけて、全体に薄く暗褐色物が付着しており、「漆塗り」の可能性はある。外面も部分的に近似した付着物がみられる。	未分析	〃
53	28	土師器 長 甕	体部内面に茶黒色炭化物が付着。	未分析	〃
54	28	曲 物	内面全体に漆が塗られており、内容物が炭化している部分もある。	漆	〃
55	28	曲 物	底板内面に炭化した内容物が付着している。該期では柿渋は使用されておらず、FT-IRからみて劣化した漆。	漆	〃

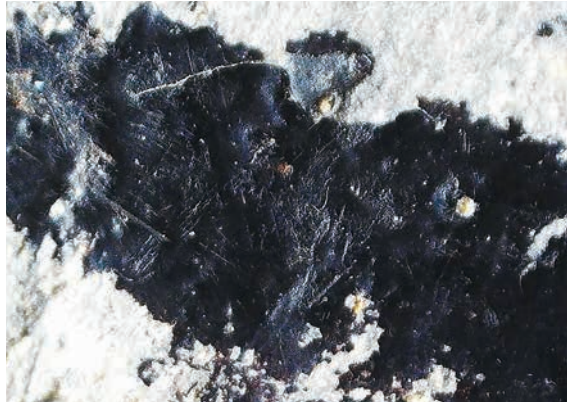
第2表 鬼倉遺跡付着物観察・同定一覧表(2)



第 22 図 実体顕微鏡写真 (1)



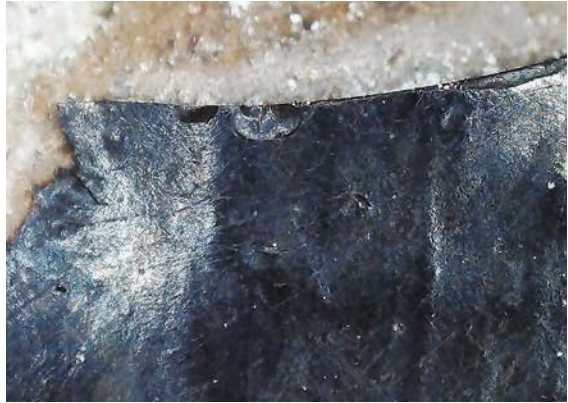
No.9



No.10



No.11



No.12



No.13



No.14

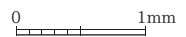


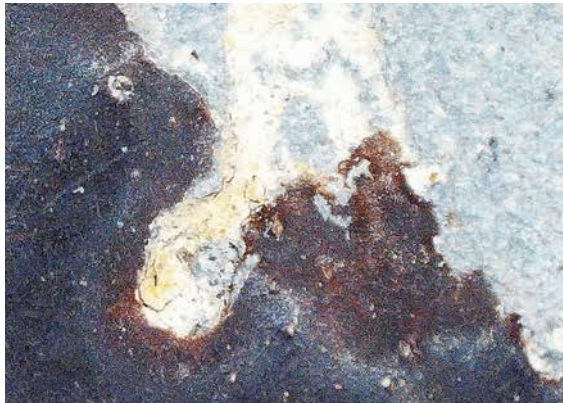
No.15



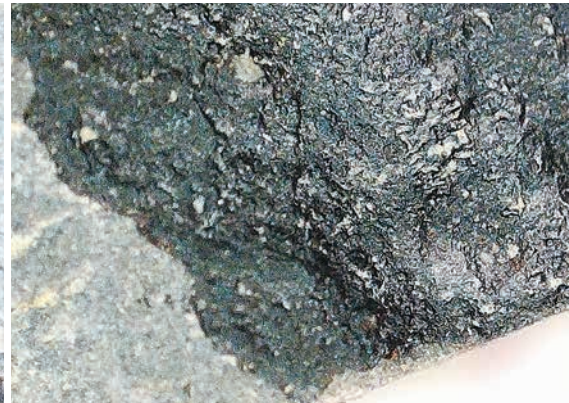
No.16

第 23 図 実体顕微鏡写真 (2)





No.17



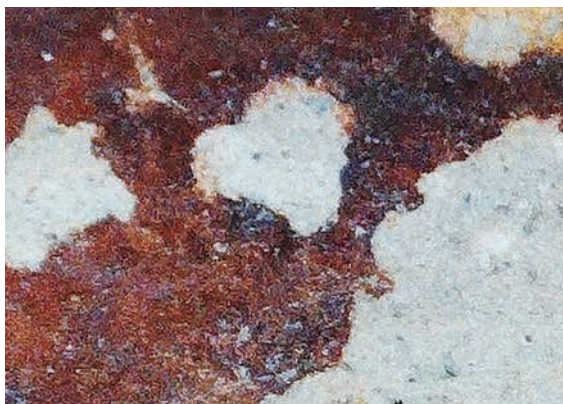
No.18



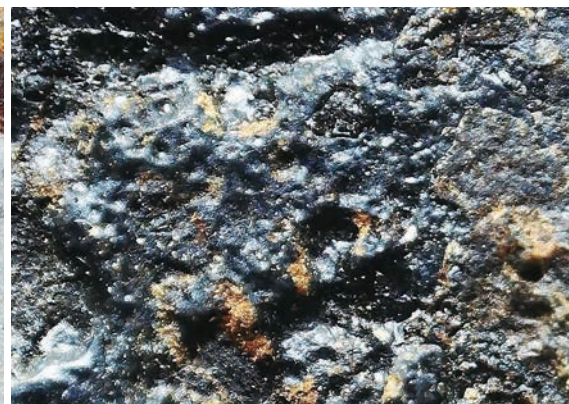
No.19



No.20



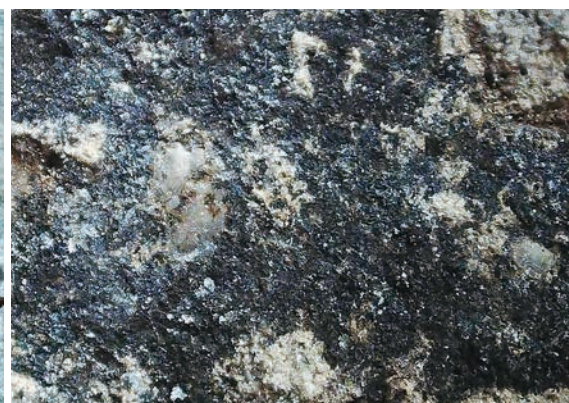
No.21



No.22

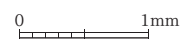


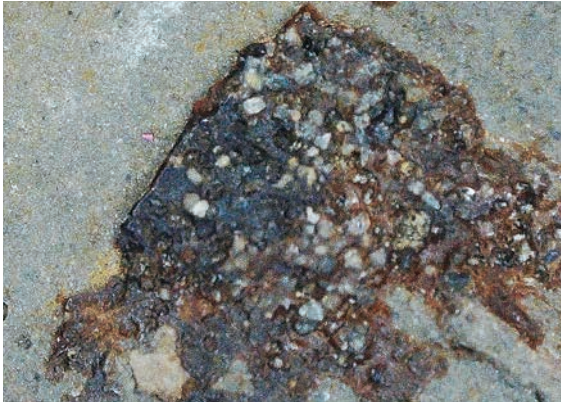
No.23



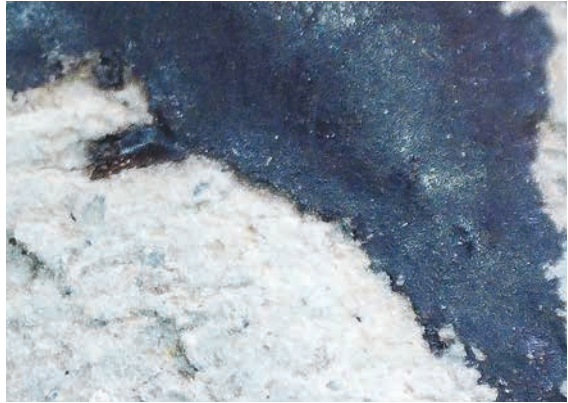
No.24

第 24 図 実体顕微鏡写真 (3)

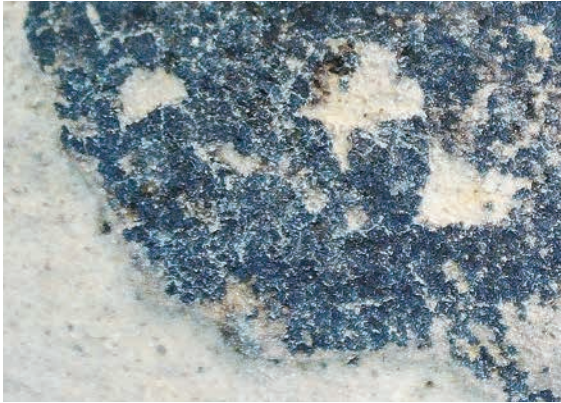




No.25



No.26



No.27



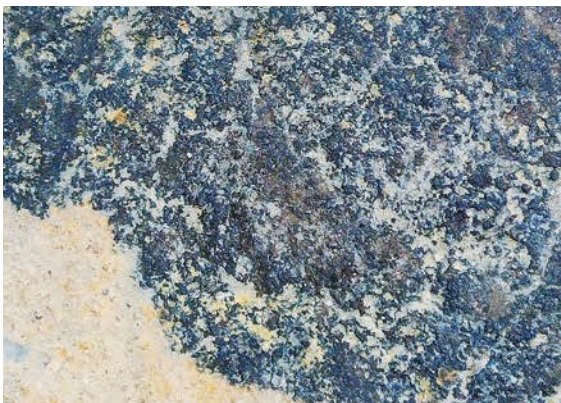
No.28



No.29



No.30



No.31



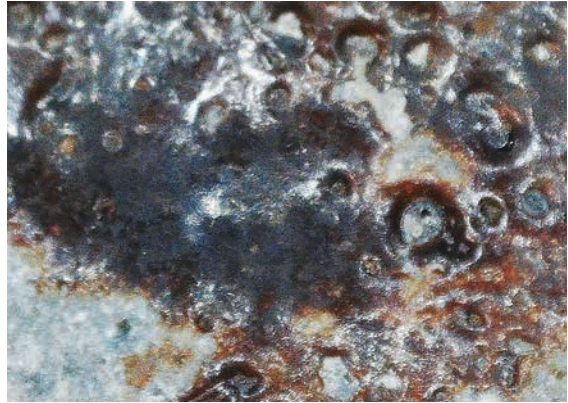
No.32

第 25 図 実体顕微鏡写真 (4)

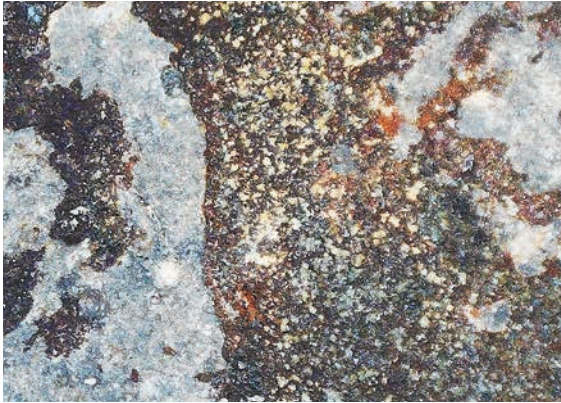




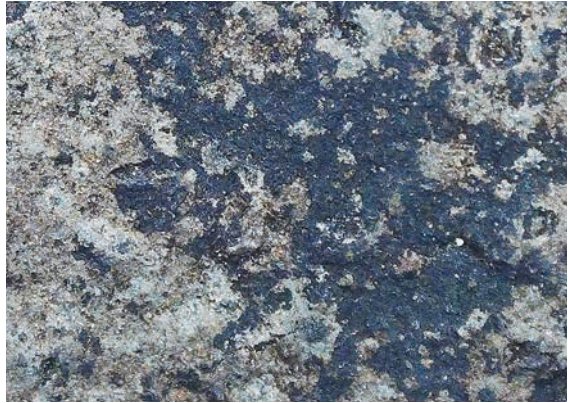
No.33



No.34 外底



No.34 内



No.35



No.36



No.37



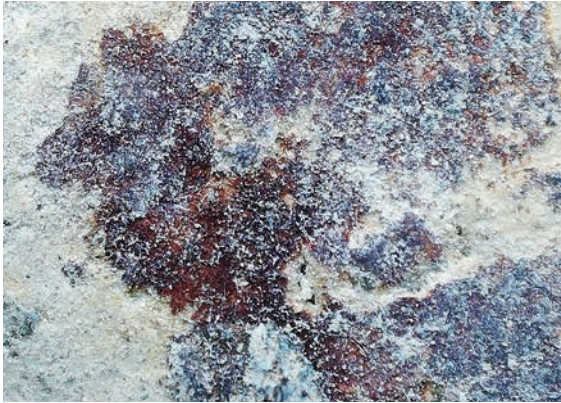
No.38



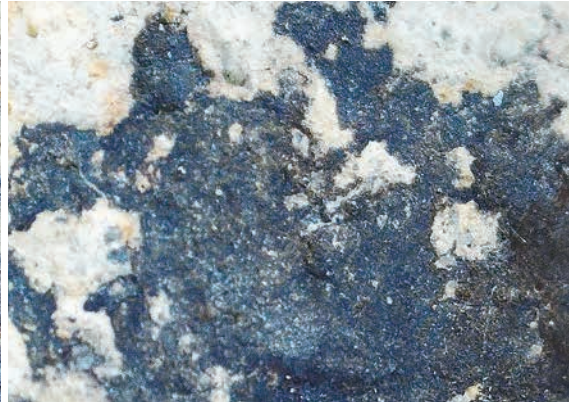
No.39

第 26 図 実体顕微鏡写真 (5)





No.40



No.41



No.42



No.43



No.44



No.45



No.46



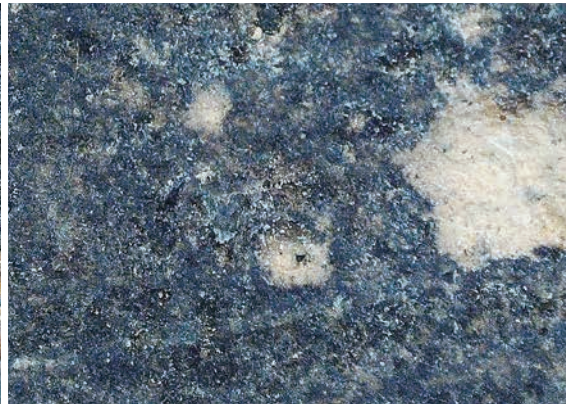
No.47

第 27 図 実体顕微鏡写真 (6)





No.48



No.49



No.50



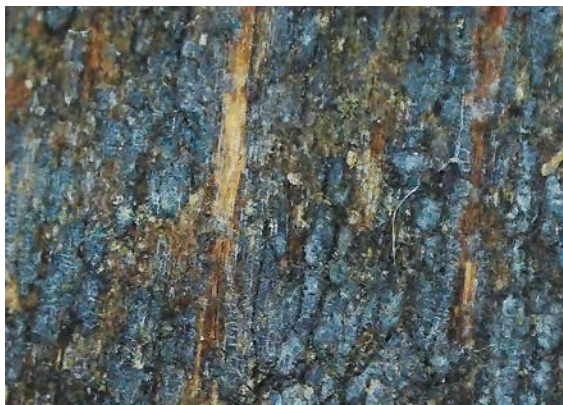
No.51



No.52



No.53

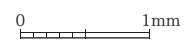


No.54



No.55

第 28 図 実体顕微鏡写真 (7)



第Ⅵ章 ま と め

1 令和元年度調査について

令和元年度は3遺跡を対象とした試掘・確認調査を実施した。それぞれ排水路改良工事、市道建設、民間開発に伴う調査である。

鬼倉遺跡 従来の周知範囲の外側を対象とした調査であったが、遺跡の拡がりや集落の消長を再認識させる貴重な土器が出土した。それは、近江産の緑釉陶器有台椀から10世紀中頃まで人々の活動がこの地で行われたことを推測させるものである。施釉陶器は鬼倉遺跡では初出であるが、これまでに馬越遺跡、中沢遺跡、太田遺跡でそれぞれ少量出土している。総数は灰釉陶器が15点、緑釉陶器が3点である。緑釉陶器は馬越遺跡から2点出土しており、いずれも京都産のものである〔伊藤2005・2010〕。

花立遺跡 これまでにも、多くの土器が畑地などで採集され、工事立会い調査においても土器が出土していたが、初めて土層や遺構を確認できた調査となった。現地表面から遺構確認面まで比較的土層の堆積は薄く、約50cmであること、平安時代の集落が存在することが明確となり、本調査が必要と判断された。

中沢遺跡 今回の調査対象地は、広大な本遺跡の北端部にあたり、堆積土層から湿地が広がっていたことが考えられる。

上記の調査成果から、各遺跡の範囲や消長を考える上で重要な情報が得られた。今後も遺跡の内容の確認と正確な範囲を更新するため、試掘・確認調査を徹底する必要がある。

2 鬼倉遺跡出土の漆付着遺物について

今回の分析は鬼倉遺跡で平成9年に行われた発掘調査で出土し、報告書〔伊藤2001〕に掲載したもの（本書第14図1～19・54・55.）と抽出外の中から再度、漆付着土器を抽出（一部実測）（第14図23・25・26・30・34・36・37・39・41～43・45・46・48. 写真図版7・8 20～53）し、土器類53点、木製品2点に対して行った。従来、報告者が主観的に漆や煤などと判断していたが、このたび四柳氏による科学分析と肉眼観察により、一部既報告の誤りを修正するとともに悉皆的に調査することで、鬼倉遺跡の漆利用の一端が明らかになったと思われる。

土器類53点のうち、漆や漆の可能性があると見做せるものは44点であった。種別では須恵器が37点、土師器が7点で須恵器が84%を占める。器種では須恵器無台杯が一番多く、須恵器の中でも76%ほどある。土師器は甕などの煮炊具で確認される。これは鬼倉遺跡が9世紀中頃を主体とし、土師器に比べ須恵器の食膳具が多い時期であることも関係しよう。

漆塗りの須恵器などは漆パレットや漆容器として利用された痕跡であろうが、底部外面に斑点状に付着しているものが注目される。市内遺跡出土の漆関連資料について概略を示した中で、類似資料が馬越遺跡から10点、中沢遺跡から2点、太田遺跡から12点確認でき、あわせて県内の各遺跡から出土した39点について集成した〔伊藤2012〕。その時点では鬼倉遺跡は6点報告していたが、今回の再抽出作業により、6点追加され、合計で12点となった。

斑点状に付けられる県内の類似資料では大半が1か所のものであるが、鬼倉遺跡の12点のうち、13・14・36の確実なもの、12・15～17・25の残存状況から推測されるものとあわせて8点（約67%）が4か所に付けられた可能性が高い。4か所に付けられた類例は馬越遺跡で1点あるが、他に管見に触れたものはなく、鬼倉遺跡の特徴的な漆記号様のものと考えられる。

また、曲物の内面に漆が塗られていたことから、漆生産や管理が行われていた可能性が高く、鬼倉遺跡が一般集落とは異なる性格を有していたことを補強する結果である。

引用・参考文献

- 伊藤秀和 2001 『加茂市文化財調査報告（13） 鬼倉遺跡 -国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書-』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2005 『加茂市文化財調査報告（14） 馬越遺跡 -国道403号線道路改良工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書-』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2010 『加茂市文化財調査報告（19） 馬越遺跡Ⅲ -県営吉津川地区ほ場整備事業及び送ガス管移設工事に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書-』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2011 「第V章まとめ 2 加茂市出土の漆付着土器について」『加茂市文化財調査報告（22）平成22年度 加茂市内遺跡確認調査報告書』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2012 『加茂市文化財調査報告（23）平成23年度 加茂市内遺跡確認調査報告書』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2013 『加茂市文化財調査報告（24）平成24年度 加茂市内遺跡確認調査報告書』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2014 『加茂市文化財調査報告（25）平成25年度 加茂市内遺跡確認調査報告書』 加茂市教育委員会
- 伊藤秀和 2016 『加茂市文化財調査報告（29）平成27年度 加茂市内遺跡確認調査報告書』 加茂市教育委員会
- 小山正忠・竹原秀雄（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修）1967 『新版標準土色帖』（1998年版） 日本色研事業株式会社
- 春日真実 1999 「第4章 第2節 土器編年と地域性」『新潟県の考古学』 新潟県考古学会
- 春日真実 2017 「古代蒲原郡の施釉陶磁器」『郷土史燕』第10号 燕市教育委員会
- 春日真実 2019 「第5章 第2節 第1項 土師器・須恵器の器種分類」『新潟県考古学会設立30周年記念誌 新潟県の考古学』Ⅲ 新潟県考古学会
- 加茂市史編集委員会 2016 『加茂市史 資料編4 考古』 加茂市
- 川上貞雄・長谷川昭一ほか 1987 『加茂市文化財調査報告（3） 東部地区遺跡詳細分布調査報告書 ～国営加茂東部地区総合農地開発事業周辺地域～』 加茂市教育委員会
- 高橋照彦 1994 「近江産緑釉陶器をめぐる諸問題」『国立歴史民俗博物館研究報告』第57集 国立歴史民俗博物館
- 高橋照彦 1995 「3. 緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』 真陽社
- 四柳嘉章 2006 『漆Ⅰ・Ⅱ』もの与人間の文化史131-I・II 法政大学出版局
- 若林知美 2004 「新潟県出土の古代施釉陶器」『新潟県考古学談話会会報』第28号 新潟県考古学談話会

別表

凡例

- 残存率 ※/36 で残存割合を示した。
- 胎土 含有物は土器の胎土に含まれる鉱物等について記した。「石」は石英粒、「砂」は砂粒、「長」は長石、「海」は海面骨針を表す。
分類は須恵器の胎土について行い、『新潟県の考古学』Ⅲの分類(春日 2019)を参考にした。B群は佐渡小泊窯跡群、C群は新津丘陵窯跡群、D群は信濃川左岸の須恵器窯跡で確認できる。
- 焼成 観察者の主観的判断で「良好」、「並」、「不良」に分類した。
- 色調 『新版標準土色帖』(小山・竹原 1967)(1998年版)の記号を記した。

別表1 兎倉遺跡 土器観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			残存率		胎土		焼成	色調		手法			回転方向	備考
					口径	底径	器高	口縁	底部	分類	含有物		外面	内面	外面	内面	底面		
5	1	工事立会い	緑緑陶器	有台椀		9.2			13/36			良	7.5Y6/2 灰オリブ	10Y5/2 オリブ灰	ヘラケズリ	ミガキ	ヘラケズリ		近江産、内面緑彩
	2	2トレンチ	須恵器	横瓶						B群	石・長	並	5PB7/1 明青灰	5P7/1 明紫灰	格子タタキ	格子当て具			
	3	工事立会い	須恵器	甕						C群	石・長	並	7.5Y6/1 灰	10BG6/1 青灰	格子タタキ	同心円当て具			
	4	工事立会い	須恵器	甕						B群	石・長	並	2.5GY3/1 暗オリブ灰	5GY5/1 オリブ灰	格子タタキ	同心円当て具			
	5	工事立会い	土師器	無台椀	13.9	7.2	3.4	5/36	8/36		石・長・砂	並	2.5Y8/2 灰白	10YR8/2 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
	6	2トレンチ	土師器	無台椀		5.0			22/36		石・長・砂	並	5YR7/4 にぶい橙	5YR6/4 にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
	7	4トレンチ	土師器	無台椀		6.4			6/36		石・長・砂	並	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
	8	2トレンチ	土師器	小甕	21.8				4/36		石・長・砂	並	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		外煤	
	9	2トレンチ	黒色土器	無台椀		5.6			11/36		石・長・砂	並	10YR7/3 にぶい黄橙	5Y4/1 灰	ロクロナデ	ミガキ	ヘラケズリ	右	内煤

別表2 花立遺跡 土器観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			残存率		胎土		焼成	色調		手法			回転方向	備考
					口径	底径	器高	口縁	底部	分類	含有物		外面	内面	外面	内面	底面		
10	1	4トレンチ	縄文土器	深鉢							石・長・砂	並	10YR5/2 灰黄褐	2.5Y5/2 暗灰黄	沈線				
	2	6トレンチ	須恵器	杯蓋	13.8			3/36		B群	石・白	並	10G6/1 緑灰	5G6/1 緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
	3	3トレンチ	須恵器	有台杯	11.0			3/36		B群	石・長	並	5B6/1 青灰	5PB6/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
	4	6トレンチ	須恵器	杯	13.8			2/36		B群	石・長	並	5PB6/1 青灰	10BG6/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
	5	6トレンチ	須恵器	無台杯	14.3			2/36		B群	石・白	並	10G6/1 緑灰	5GY6/1 オリブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
	6	4トレンチ	須恵器	無台杯	12.8			4/36		B群	石・白	並	10BG5/1 青灰	5BG6/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
	7	6トレンチ	須恵器	無台杯	10.8			6/36		B群	石・白	並	5G6/1 緑灰	7.5GY5/1 緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
	8	6トレンチ	須恵器	無台杯	9.6			18/36		B群	石・白	不良	5GY6/1 オリブ灰	2.5GY6/1 オリブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
	9	6トレンチ	須恵器	無台杯	8.6			9/36		B群	石・白	並	10BG6/1 青灰	5BG6/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り		
	10	4トレンチ	須恵器	無台杯	7.5			11/36		B群	石・長	並	10BG7/1 明青灰	5BG7/1 明青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り	右	
	11	5トレンチ	須恵器	無台杯	7.4			8/36		D群	石・長	並	7.5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り	右	底外「干」墨書
	12	5トレンチ	須恵器	鉢						C群	石・長	並	7.5Y6/1 灰	5GY6/1 オリブ灰	格子タタキ、カキメ	同心円当て具			
	13	6トレンチ	須恵器	甕						C群	石・長	並	5P6/1 紫灰	5BG5/1 青灰	平行タタキ	同心円当て具			
	14	5トレンチ	須恵器	甕						C群	石・長	並	5PB6/1 青灰	5PB7/1 明青灰	平行タタキ	同心円当て具			
	15	6トレンチ	土師器	無台椀	6.0			10/36			石・砂	不良	5YR7/4 にぶい橙	5YR7/4 にぶい橙	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り		
	16	4トレンチ	土師器	長甕	9.0			13/36			石・砂	並	2.5Y7/2 灰黄	5Y7/2 灰白					
	17	2トレンチ	土師器	小甕	14.9			5/36			石・砂	並	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR8/3 浅黄橙	ロクロナデ	ロクロナデ		外煤	
	18	1トレンチ	土師器	鍋	39.0			2/36			石・長・砂	並	7.5YR7/4 にぶい橙	2.5YR6/6 橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
	19	1トレンチ	土師器	鍋	37.0			2/36			石・長・砂	並	7.5YR7/3 にぶい橙	10YR7/2 にぶい黄橙	ロクロナデ、カキメ	ロクロナデ、カキメ			

別表3 花立遺跡 石器観察表

図No.	報告番号	出土位置	種別	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	色調	備考
					長さ	幅	厚み				
10	20	6トレンチ	石製品	砥石	8.8	2.8	2.8	77.24	凝灰岩	2.5Y8/3 淡黄	擦痕・砥面4面

別表4 鬼倉遺跡出土須臾器・土師器・木製品観察表(付着物の科学分析試料)

本書 第14図 写真 図版	報告書		市史	類別	器種	法量 (cm)			胎土	精成	色調			手法			回転 方向	備考	
	掲載番号 (伊藤2001)	掲載番号 (伊藤2011)				掲載番号 (加茂市2016)	口径	底径			器高	口縁	底部	分類	含有物	外面			内面
1	第86図-675	第22図-10	須臾器 有台杯	須臾器	有台杯	12.3	6.8	3.6	6/36	35/36	C群長	並	10G6/1 緑灰	5BG6/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底内漆付着
2	第62図-438	第22図-11	須臾器 長頸面	須臾器	長頸面						D群石・長	並	10B6 4/1 暗青灰	5G3/1 暗緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	右	頸部内茶黑色付着物
3	第62図-437	第22図-12	須臾器 広口壺	須臾器	広口壺	12.2					C群石・長	並	5PB5/1 青灰	5F6/1 紫灰	ロクロケズリ・ナデ	ロクロナデ	ハラケズリ		内暗褐色付着物? 内暗褐色付着物?
4	第61図-425	第22図-13	須臾器 有台杯	須臾器	有台杯	11.8	7.4	3.8	8/36	36/36	B群石	並	5BG4/1 暗青灰	2.5G5/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	内外面漆付着(漆ハレット)、底外黒書「床カ」
5	第59図-392	第22図-14	須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	12.5	8.6	3.0	36/36	36/36	B群石・長	並	10G6/1 緑灰	5BG4/1 オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	内外面漆付着
6	第67図-511	第22図-15	須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	11.8	8.0	3.1	9/36	15/36	B群石・長	並	10B6 4/1 暗青灰	5BG4/1 暗青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	内外面漆付着
7	第66図-661	第22図-16	須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	11.5	7.6	3.1	3/36	36/36	C群長	並	N5/1 灰	10BG5/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	内外面漆付着
8	第86図-660	第22図-17	須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	11.1	7.6	3.0	13/36	16/36	B群石・白	並	5BG5/1 青灰	10G4/1 暗緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	右	内外面漆付着
9	第86図-660	第22図-18	須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	10.8	7.6	3.1	7/36	13/36	B群石・白	並	N5/1 灰	5BG4/1 暗青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	右	内外面漆付着
10	第56図-348	第22図-19	須臾器 杯蓋	須臾器	杯蓋	14.8			2/36		B群石・長	並	10G5/1 緑灰	5PB6/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	天井部外漆書
11	第54図-302	第22図-20	須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	11.7	7.5	3.0	31/36	36/36	B群長	並	5B4/1 暗青灰	5BG4/1 暗青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書
12	第56図-343	第22図-21	須臾器 有台杯	須臾器	有台杯	14.8	8.2	8.3	4/36	15/36	B群長	並	5BG5/1 青灰	10GY6/1 緑灰	ロクロケズリ・ナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書、内漆?付着
13	第53図-276	第22図-22	須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	12.4	8.0	3.1	36/36	36/36	B群白	並	5GY5/1 青灰	5BG5/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書、内漆付着
14	第54図-305	第22図-23	須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	12.4	8.0	3.1	20/36	36/36	B群石・長	不良	5Y5/2 灰オリーブ	2.5Y6/1 灰黄	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書、内漆?付着
15	第29図-138	第22図-24	須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	12.6	8.2	2.9	16/36	18/36	B群白	並	5BG6/1 青灰	10G5/1 緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書、内漆?付着
16	第36図-219	第22図-25	須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	8.2	8.2				B群白	並	10G5/1 緑灰	10GY5/1 緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書、内漆付着
17	第85図-652	第22図-26	須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	13.2	9.4	3.0	6/36	15/36	B群白	並	10G6/1 緑灰	5BG6/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書
18	第61図-420		須臾器 無台杯	須臾器	無台杯						B群石・長	並	10G4/1 暗緑灰	5GY4/1 暗オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書、内漆付着
19	第39図-257		須臾器 有台杯	須臾器	有台杯	12.0	8.2	2.8	13/36	36/36	B群石・白	並	10B6 4/1 暗青灰	5BG5/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書
23	7		須臾器 有台杯	須臾器	有台杯		7.8				5/36 B群石・白	並	7.5GY5/1 緑灰	5GY5/1 オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書
25	7		須臾器 有台杯	須臾器	有台杯	12.8	7.4	3.4	1/36	16/36	B群白	並	5GY6/1 オリーブ灰	10GY6/1 緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書
26	7		須臾器 無台杯	須臾器	無台杯						B群白・白臧	並	7.5GY6/1 緑灰	2.5GY6/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書
30	7		須臾器 長頸面	須臾器	長頸面						B群白	並	N6 灰	5PB6/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	外漆付着
34	7		須臾器 有台杯	須臾器	有台杯		8.7				7/36 B群石・白	並	5PB4/1 暗青灰	5PB5/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書、内漆付着
36	7		須臾器 有台杯	須臾器	有台杯		8.0				11/36 B群石・白	並	2.5GY5/1 緑灰	7.5GY5/1 緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書、内漆付着
37	7		須臾器 有台杯	須臾器	有台杯	11.9			4/36		B群石・長	並	10G5/1 緑灰	5BG6/1 青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	内外面漆付着
39	7		須臾器 杯蓋	須臾器	杯蓋						B群白・白臧	並	10G7/1 明緑灰	5G6/1 緑灰	ナデ	ナデ	ハラケズリ	左	内外面漆付着
41	7		土師器 杵	土師器	杵	3.8			19/36		石・砂	並	10YR7/2 にぶい黄體	2.5Y7/3 淺黄	ナデ	ナデ	ハラケズリ	左	底外漆付着、ハラ記号
42	8		須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	7.0	7/36				B群石・白	不良	5GY6/1 オリーブ灰	2.5GY6/1 オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆付着
43	8		須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	7.6	11/36				B群白・白臧	並	10G6/1 緑灰	10GY6/1 緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆付着
45	8		須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	6.6	4/36				B群石・長	並	2.5GY8/1 灰白	2.5GY7/1 明オリーブ灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	底外漆書
46	8		須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	12.8			3/36		B群白	並	5BG5/1 青灰	10G5/1 緑灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	内外面漆付着
48	8		須臾器 無台杯	須臾器	無台杯	11.0			4/36		B群石	並	10Y7/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	ハラケズリ	左	内外面漆付着
本書 第14図 写真 図版	報告書		市史	類別	器種	法量 (cm)			胎土			色調			手法			備考	
第14図 写真 図版	掲載番号 (伊藤2001)	掲載番号 (伊藤2011)	掲載番号 (加茂市2016)			長さ/ 口径	幅/ 底径	器高	本取り	厚さ	樹種								
54	第72図-549			木製品	曲物	16.8	17.3	11.5	0.7		スギ	内面漆付着 ※保存処理後に549と550が接合したため実測図と写真が異なる。法量の中で諸高は接合後の計測値である。							
55	第90図-734			木製品	円形板	10.2			0.4		ヒノキ	内面漆付着							

写真図版



鬼倉遺跡 調査地近景（南西から）



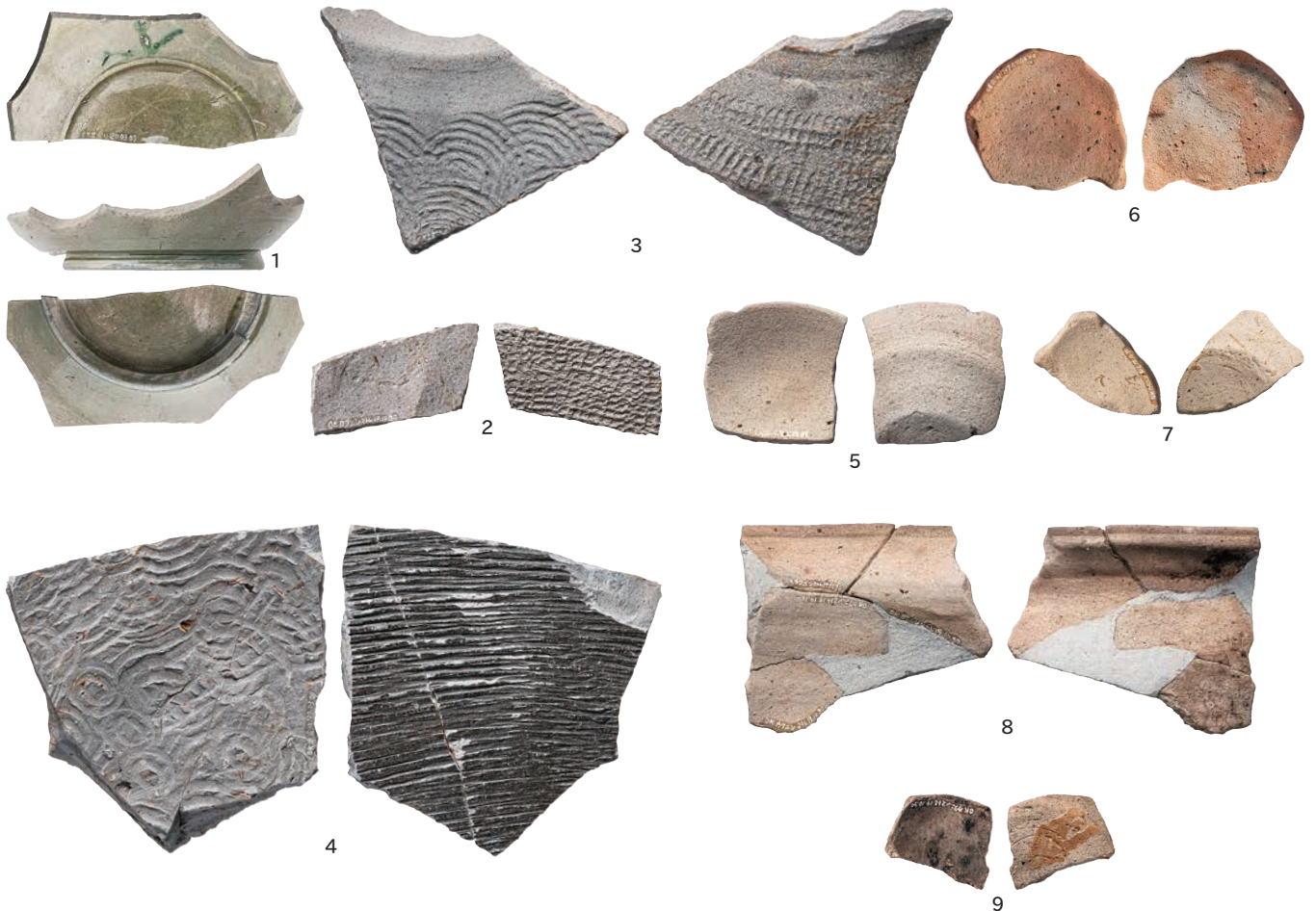
鬼倉遺跡 2 トレンチ土層断面（南東から）



鬼倉遺跡 3 トレンチ土層断面（南東から）



鬼倉遺跡 6 トレンチ土層断面（南東から）



鬼倉遺跡 出土遺物



花立遺跡周辺の空中写真



花立遺跡 調査地近景（北東から）



花立遺跡 調査地近景（西から）



花立遺跡 3 トレンチ調査風景 (南から)



花立遺跡 6 トレンチ調査風景 (北西から)



花立遺跡 1 トレンチ土層断面 (東から)



花立遺跡 2 トレンチ土層断面 (東から)



花立遺跡 3 トレンチ土層断面 (東から)



花立遺跡 4 トレンチ土層断面 (西から)



花立遺跡 4 トレンチ遺構確認状況 (西から)



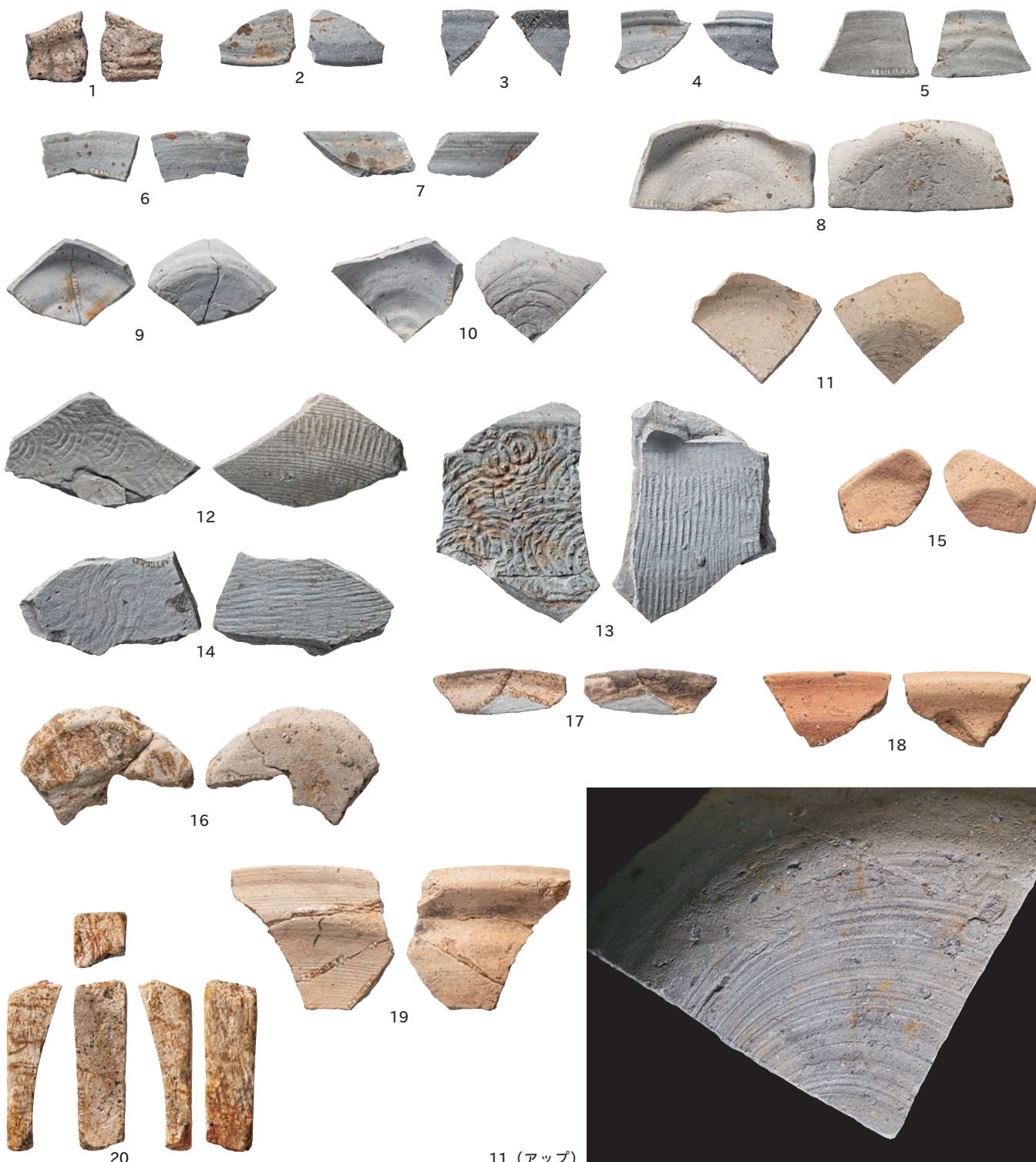
花立遺跡 5 トレンチ土層断面 (北から)



花立遺跡 5 トレンチ遺構確認状況 (北から)



花立遺跡 6 トレンチ土層断面 (西から)



11 (アップ)

花立遺跡 出土遺物

[1 : 3]



中沢遺跡 調査地遠景（南西から）



中沢遺跡 調査地近景（北東から）



中沢遺跡 1 トレンチ調査風景（南東から）



中沢遺跡 2 トレンチ調査風景（南西から）



中沢遺跡 3 トレンチ調査風景（南西から）



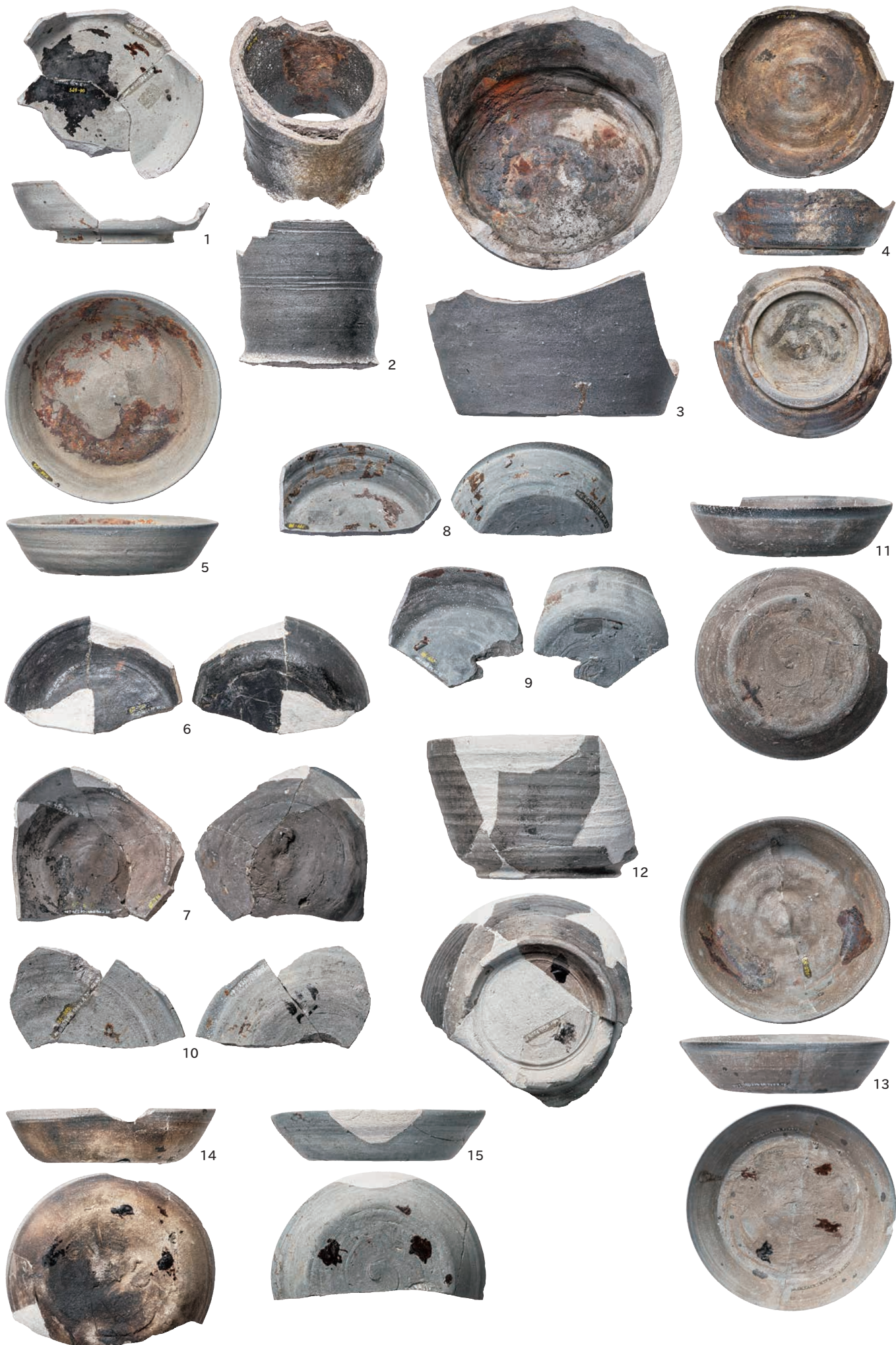
中沢遺跡 1 トレンチ土層断面（南西から）

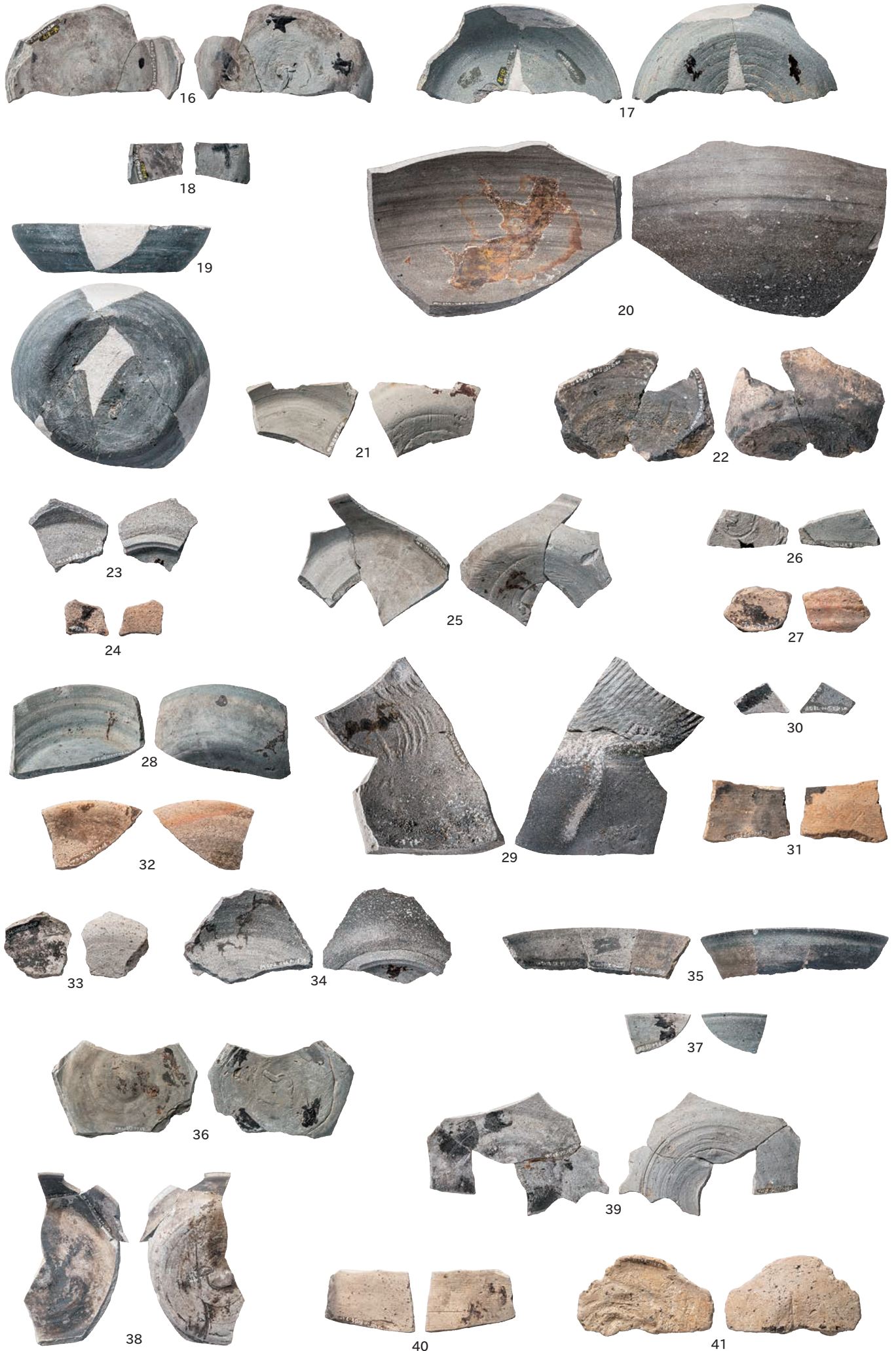


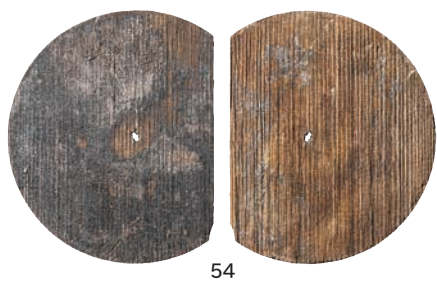
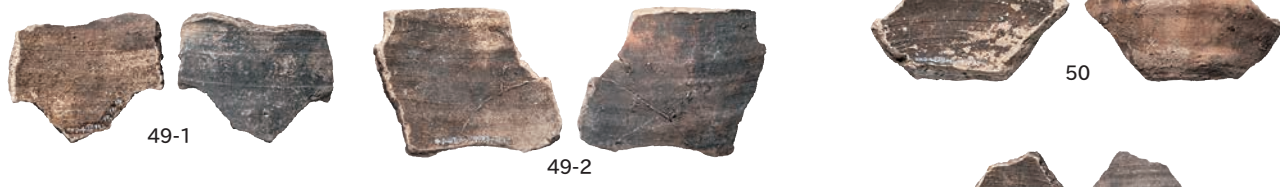
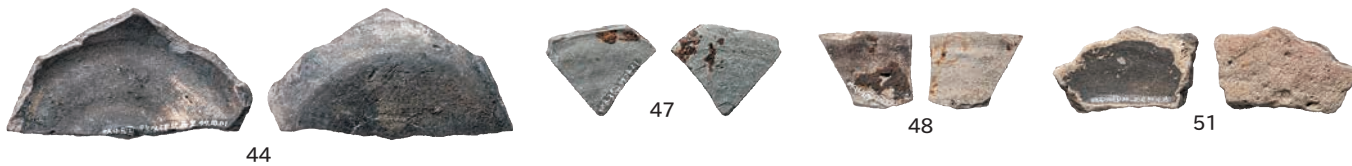
中沢遺跡 2 トレンチ土層断面（北東から）



中沢遺跡 3 トレンチ土層断面（北東から）







報告書抄録

ふりがな	かもしないいせきかくにんちようさほうこくしよ							
書名	令和元年度 加茂市内遺跡確認調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	加茂市文化財調査報告(33)							
編著者名	伊藤秀和							
編集機関	加茂市教育委員会 社会教育課							
所在地	〒959-1392 新潟県加茂市幸町2丁目3番5号 TEL 0256(52)0080							
発行年月日	西暦 2021年3月17日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
おに くら い せき 遺跡	か も し お お あ ざ げ じ ょう 加茂市大字下条 あ ざ よ こ み ち 字横道598番地 ほか	15209	116	37度 39分 42秒	139度 01分 46秒	20191030	18	農業用排水路 改良工事
はな たて い せき 遺跡	か も し お お あ ざ げ じ ょう 加茂市大字下条 あ ざ ふ く じ ま こ う 字福島甲260-1 番地ほか	15209	104	37度 38分 57秒	139度 02分 09秒	20191216	41	市道建設工事
なか ざわ い せき 遺跡	か も し し ば の お つ 加茂市芝野乙 449番地ほか	15209	119	37度 39分 39秒	139度 02分 01秒	20191223	25	民間開発
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
鬼倉遺跡	集落跡	古代				土師器・須恵器	近江産の緑釉陶器を採取 須恵器・土師器・木製品 付着物の科学分析	
花立遺跡	遺物包含地	古代		ピット・溝		土師器・須恵器	平安時代の集落跡	
中沢遺跡	集落跡	弥生～中世						

加茂市文化財調査報告(33)	
令和元年度	
加茂市内遺跡確認調査報告書	
鬼倉遺跡	
花立遺跡	
中沢遺跡	
鬼倉遺跡出土須恵器・土師器・木製品付着物の科学分析	
印刷年月日	令和3年3月10日
発行年月日	令和3年3月17日
発行・編集者	加茂市教育委員会 〒959-1392 新潟県加茂市幸町2丁目3番5号 TEL 0256(52)0080
印刷所	株式会社 小野塚印刷所 〒959-1354 新潟県加茂市新町1丁目5番16号 TEL 0256(52)0056